東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF
TOHOKU UNIVERSITY
OF ART AND DESIGN

第27号 2020年3月

舞台制作におけるクリエイティブ論
― 〝楽劇『影向のボレロ』の事例研究〟 ―

Creative Theory in Stage Production
― “A Case Study of the Opera ‘Yo-gou no Bolero’ ” ―

志賀野 桂一 | SHIGANO Keiichi

舞台制作におけるクリエイティブ論
― 〝楽劇『影向のボレロ』の事例研究″ ―

Creative Theory in Stage Production
― “A Case Study of the Opera ‘Yo-gou no Bolero’ ” ―

志賀野 桂一｜SHIGANO Keiichi

The production of an opera called “Comprehensive Art” requires a way of working and customs that can overcome the differences in work styles, customs, and ways of thinking for each occupation. This paper is a case study as a reference for acquiring creative work and results through such a production process.
The example taken up in this paper is a project commemorating the 150th of the anniversary Boshin-War in Shirakawa City, Fukushima Prefecture. Shirakawa Performing Arts Theatre Hall (COMINESS) will take up the new opera “Yo-gou no Bolero” in March 2019.

Keywords:
楽劇（オペラ）、舞台公演、制作、クリエイティブ、演出家
Opera, stage performance, production, creative, director

はじめに

筆者は数年にわたり創造的舞台制作をプロデユースしてきた。中でも《総合芸術》と呼ばれるオペラの制作は、舞台芸術に関わるあらゆる分野を総動員してとりかかって初めて成立する公演である。分野ごとの仕事の仕方や習慣、考え方の違いを乗り越える方途や調整能力も要求される。舞台公演の中でも最も困難を伴う舞台制作がオペラ公演と言える。それだけに様々なクリエイティブが集合するプロジェクトでもある。本稿はこうした制作過程を通してクリエイティブな仕事と成果を獲得するための参考としての事例研究である。

本稿で取り上げる事例は、福島県白河市が、戊辰戦争150年を記念し合同慰霊祭をはじめ様々な記念事業に取り組んだが、その一連の事業の中で、白河文化交流館（通称:コミネス）が国の助成事業の採択を受けて2019年3月に実施した新作楽劇『影向のボレロ』を取り上げる。

1. オペラは総合芸術―クリエイティブの複合体

この楽劇は、生オーケストラ、劇と踊り、合唱、バレエなどで構成《音楽劇・オペラ》である。以下、図表1に見る通り、縦軸には職域ごとのクリエイティビティ―の差異を示しており、横軸には〇構想、〇企画、〇戦略、〇戦術、〇オペレーションの各段階で、それぞれの主な仕事と課題を示している。

職域によって行うべき仕事を上げてみる。

Aプロデューサーでは、《作品制作》と《集客・営業》コンセプト、スタッフ構成と座組み、資金調達・公的助成金と民間、企業協賛、キャスティング、広報プロモーション、販促・ブームアップ・スケジュール管理が主な仕事となる。

B脚本家では、劇の構成、主題の決定、展開イメージ、資料調査サーベイ、文章、脚本と台本制作となり、B作詞家は、主題・言葉・韻・省略・暗示・展開・リズム・字数などを踏まえ作詞していく。

C1音楽家は、作曲・編曲・楽譜の制作などを行う者と、C2演奏・指揮など舞台に乗る者の別がある。また兼ねる場合もある。

BとCについては個人ワークにゆだねられる項目で、仕事の仕方も人により異なる。

D演出家の仕事は多岐にわたり、舞台美術の方針、照明・音響への要求、舞台展開・特殊技術の使用方針、演技指導、振り付け、殺陣、見せ場づくり、公演時間の管理、幕の使い方の指示などで、今回の公演制作では演出部の指導陣が、筆者を含め7人で取り組んだために、それぞれの考え方の差異や、習慣の違いもあり難しい事業となった。

この中でも筆者が重視している項目は、スタッフ座組みで、会館職員と外部スタッフの意思疎通や人間関係の良し悪しが事の成否に大きく関係するからである。制作面では、出演キャストにも増して、スタッフ同士の人間関係・信頼関係・共感関係、専門家集団、円滑なコミュニケーションが不可欠である。

オペラは総合芸術（クリエイティブの複合体）

	構想	企画	戦略	戦術	オペレーション（現場）
Aプロデューサー（作品制作・営業）	いつ・どこで・何を・何のために、有料・無料、音楽家、演出家	タイトル/主催・後援/主なキャスト・目玉、デザインコンセプト	キャッチフレーズ、広報・販促計画・資金調達	スタッフ座組み団体割引、ブームアップキャンペーン etc	キャスト予約と契約、チケット販売、DM、印刷、SNS、etc
B脚本・台本・作詞（家）	題材、主人公、時代、場所、資料サーベイetc	長さ・何幕物、登場人物、場面、人数	人物キャラクターの設定、展開	プロットの作り込み	進行台本化、下書き、稽古に合わせた修正
C1音楽家（作曲）	脚本の読み込み構想、作曲期限	曲数、長さ、演奏団の編成・作曲	曲想の決定、楽譜作成	オケ譜・ピアノ譜・パート譜	楽譜印刷、音源の作成、稽古、
C2音楽家（演奏）	譜読み、音楽監督の意図を知る	指揮者との合わせ	ボーイングなどの決定	楽譜への書き込み、個別稽古	演奏/合わせ・リハーサル・本番
D演出家（演出・振付）	脚本・台本の読み込み	キャスティング、照明・音響・美術番盤表策定	全体の演出・照明・大道具プラン	毎毎の演出プラン個別稽古、音楽との合わせ	リハーサル、ダメ出し、通し稽古、幕や照明の調整

©表作成：吉留勝

図表1:オペラは総合芸術―クリエイティブの複合体

2. 新作楽劇の概要

（1） 概要

この新作楽劇は、beyond2020認証を受け、また、文化庁・文化芸術創造プラットフォーム形成事業という助成枠で、「文化芸術創造拠点形成事業」30年度分/助成採択を受けた。事業の位置づけは、「白河戊辰150周年記念事業・舞台公演（30年度事業）」として計画・実施した。

■公演タイトル：新作楽劇 『影向のボレロ』
■公演日時：2019 年 3 月 24 日（日）
午後2時～5時45分
3月23日（土）は公開GP.
■会場：白河文化交流館コミネス大ホール
■主催：白河市、白河文化交流館コミネス、
戊辰150周年記念事業実行委員会
■共催：福島民報社
■後援：福島県、福島県教育委員会、
福島民友新聞社、（株）ラジオ福島、NHK福島放送局、福島テレビ、福島中央テレビ、福島放送、テレビユー福島、白河市教育委員会、白河観光物産協会、白河商工会議所、JC、
■助成：文化庁
◆音楽監督（作曲・編曲・指揮）：松下功（東京藝大副学長・作曲家）途中代わって川島素晴（国立音楽大学准教授・作曲家）
◆挿入歌作詞:夢枕獏(作家)、志賀野桂一
◆構成台本・演出:志賀野桂一
◆制作顧問（アドバイザー）:平井洋
◆制作（制作委員会:主幹）:河原田東司

（2） 公演内容

この楽劇は、生オーケストラ、劇と踊り、合唱、バレエなどで構成される、全四幕11場からなる2時間45分の《音楽劇・オペラ》である。

1868年の戊辰戦争、中でも激戦の舞台となった白河口の戦いや二本松の戦いに焦点を当て、東北列藩側の苦悩も表される。戦争行う東北諸藩の思惑や会津藩、仙台藩内の確執など戦争を巡る様々な話を本楽劇ではあくまで史実

として押えつつ、主題は民衆の弔い方や、普遍的な人間同士の絆や縁の不思議さにおいている。そして戊辰戦争の中で最後に浮かび上がるのが「仁」の心である。

タイトルに使った影向（ようごう）とは「神・仏が仮の姿で、この世にあらわれる様」という意味である。白河地域では「戊辰戦争で、両軍の戦死者を分け隔てなく手厚く弔った。」という言い伝えが広く残っている。このエピソードが脚本の軸となった。

では、劇では誰が神・仏なのか?人々(民衆）の心に神仏が宿った!象徴的な行為と考えたのである。

（3）　幕・場のタイトル

プロローグ
第一幕　現代日本
　第1場　戦いの予兆・招魂
　第2場　現代・白河のお盆（季節は夏）
　第3場　白河踊り変奏曲
　　（メタモルフォーゼ）
第二幕　1868年京都
　第1場　京都まちなか（季節は冬）
　第2場　鳥羽伏見の戦いの勃発
　　＜休憩＞
第三幕　戊辰・東北戦争へ
　第1場　東北列藩の衆議と嘆願
　　1-1　白石城での衆議
　　1-2　仙台城での嘆願
　第2場　世良修蔵の乱行と誅殺
　　2-1　世良修蔵の乱行
　　2-2　世良修蔵の誅殺
　第3場　白河の戦い（季節は春）
　　3-1　白河城の奪還
　　3-2　東軍の勝利
　　3-3　東軍の敗戦
　　＜休憩＞
第四幕　戊辰戦争の終結
　第1場　二本松少年兵士（季節は秋）
　第2場　民衆の弔いと招魂
　　2-1　民衆の弔い
　　2-2　合唱「よみがえる」
　　2-3　招魂碑の前で
　第3場　盆踊り～大団円（季節は夏）
　　3-1　西軍兵士の対話
　　3-2　母子の対話
　　3-3　ダンスボレロ
　　3-4　和太鼓「飛天遊」
　　3-5　合唱「元素わたし」
カーテンコール

（4）　物語

この物語は、1868年（慶応4年）1月3日京都郊外の鳥羽・伏見で勃発から1869年（明治2年）5月18日榎本武揚軍が、新政府軍に降伏するまでの18ヶ月にわたる戊辰戦争を背景とした『人の仁を問う物語』である。

戊辰戦争は、日本における京都・東京・北越・東北・北海道函館と広域にわたる武家社会から近代社会への時代の大きな変革期の内戦であった。会津藩の征討を巡っての義軍としての東軍は、やがて奥州越列藩同盟として薩長からなる朝廷（西）軍と戦火を交えることとなっていく。とりわけ白河口の戦いは100日も続き東北での大きな戦いであった。

東北戊辰戦争、東軍4,979名西軍1,434名で総計では6,000名を超えると伝えられている。最初の本格的な攻防戦の戦いが行われた地が「白河」であった。物語の展開は、戦争の発端ともなった京都鳥羽伏見の戦い、そして東北白河、世良修蔵の誅殺などを経て、二本松の戦いと続いていく。

この楽劇は、一見、戊辰戦争そのものを描いているように見えるが、主題はむしろ「人々の弔い方」や「敵味方同士の交流」の歴史である。

白河地域では、戦死者対して、両軍の兵士を敵味方なく手厚く弔ったことが伝えられている。このことは、古代より続く日本人の死生観が、往時の民衆に生き続けていることを示している。多くの遺体両軍の戦死者を弔おうとする民衆の姿が描かれ、「死んだら仏だ、敵も味方もない」そうした素朴な民衆の心情が豊かな地方弁で吐露される。

こうした戦いの終わりに「甦る」という《愛と平和》の大合唱が歌われる。

また、ひと組の時空を超える母子が、現代白河お盆の季節に登場し、その後、150年前の戊辰戦争を見つめる設定となっている。そして母子は、敵味方の血を分けた同朋であることが暗示され、招魂碑の前では先祖からメッセージ を

受け取ることとなる。

終盤で繰り広げられているのは正調白河踊りである。幽霊の西軍の兵士はその盆踊りを見つめ往時の心境を語る。西軍によって持ち帰られた「白河踊り」は萩市で今も踊り継がれている。踊りはやがて現代のダンスに変化して全員で踊るシーンとなり「元祖わたし」の合唱で大団円となる。

冒頭の和太鼓協奏曲は、終盤でも奏でられ、戊辰の人々の魂を招きよせるシンボル的な楽曲となっている。喩えればお盆の迎え火・送り火にあたる。

戦争の最中に起きた交流の史実は、日本人の心に敵味方なく「仁」の心が宿っていることを教えてくれる。もしかしたら戦乱を乗り越える視点がここにあるのでは…と思わせてくれる。

楽劇を通して、史実を伝える役は噺家の春風亭昇羊が務める。

（5）　出演者　＊主要キャストはゴシック

ナレーター（時の案内人）：**春風亭昇羊**
　ヨーコ：**和知澄子**
　シンイチ：**和知泰良**
［民衆］
中年の女A：伊勢薫子
中年の女B：妹尾美由紀
若い女性(女子高生)A：菊地美柚
若い女性(女子高生)B：寺島涼加
若い女性(女子高生)C：堀内野々香
若い女性(女子高生)D：小浜美紅
お爺さん：岡部光男
爺さんの孫1：十文字栞
爺さんの孫2：穂積桜太
中年の男A：根本紀光
中年の女C：鳴島あや子
京都公卿：中川雅寛
女官たち：岡崎あけみ、田村奈緒子
　　（日本 舞踊中川流 社中）
京都の雅な人達：女性バレエダンサー
　佐藤玲奈、鈴木彩矢、近藤なぎさ、
　嶋田萌々香、有賀詩、林芳那子
新撰組隊士：男性バレエダンサーほか
プロバレエダンサー［男］：
　倉谷武史、須藤悠、土井翔也人、
　井上良太、新井悠汰
土方歳三：山中迓晶
［ガヤ］
A(白石会議)B(仙台会議)：以下8名
　金沢眞、柳沼良平、池田拓海、
　穂積学、和知健明、鈴木翔瑛、
　須藤隼音、薄井聖人
九条道孝：有賀一裕
世良修蔵（長州藩・西軍）：牧田純一
遊女 白糸（福島市の旅籠）：平山桃子
赤坂幸太郎（東軍・仙台藩）：和知健明
姉歯武之進（東軍・仙台藩）：鈴木翔瑛
遠藤条之助（東軍・福島藩）：須藤隼音
西郷頼母（東軍・會津藩）：金沢眞
阿部内膳（東軍・棚倉藩）：穂積学
奥羽列藩同盟軍（東軍）：兵士役全員
小峰城守備兵（二本松藩）：内海邦治
掛け声・群衆（東西軍）：兵士役全員
横山主税（會津藩・東軍）：須藤隼音
坂本大炊（仙台藩・東軍）：薄井聖人
若い家来A（會津藩・東軍）：柳沼良平
若い家来B（會津藩・東軍）：池田拓海
新撰組隊士：齊須紗知子・東風谷美佳
西軍司令官（西軍）：大越祐也
西軍兵士A（西軍）：牧田純一
西軍兵士B（西軍）：須藤隼音
西軍兵士C（西軍）：薄井聖人
広田弘道（土佐藩・西軍）：池田拓海
岡山篤次郎（二本松藩）：大河内渉
二本松少年隊士：十文字栞、穂積桜太、
　小浜美空、八杉 愛、佐藤愛美、寺島涼加、
　堀内野々花
　［町民（白河の民）］
　　民衆A:露木則子
　　民衆B:岡部光男
　　民衆Cその他:根本紀光、井沢美代子、
コミネス混声合唱団+プロの声楽家:
　唐沢萌加、国分晴香、竹内玲奈、
　眞玉郁碧、渡辺摩裕美、村松稔之、

圓谷俊貴、前川健生、小仁所良一

［白河踊り］

掛け声①②：太田かずえ

白河おどりの輪（民衆）：白河民舞愛好会

盆踊り太鼓：飯沢太鼓保存会3名

盆踊り笛：白河中央祭りばやし保存会9名

西軍の兵士a（西軍）穂積学

西軍の兵士b（西軍）須藤隼音

影の声1（先祖：男=税所篤人）：山中迓晶

影の声2（先祖：女=丹羽求馬の娘）：

十文 字律子

その他の東軍&西軍兵士：

渋木大介、有賀毅、片桐伸太郎、

片野仁人、金沢史典、金子善弥、

小磯祥晃、高橋和弘、鈴木正義、

関戸忠義、竹井宏友、西坂雄冶

（6） 演 奏 出演者

指揮/音楽監督/ピアノ：川島素晴

和太鼓：林英哲

笙（京都公家役）：真鍋尚之

篳篥（京都公家役）：三浦元則

管弦楽：福島フィルハーモニックオーケストラ

合唱：コミネス混声合唱団

3. 舞台制作の現場～課題と対応

舞台制作とひと口で言ってもその業務は多岐にわたっている。大きく分けて3つに分けて本事例を詳述してみたい。第1は作品創造に係る分野で作品構成（脚本や台本）、音楽、 舞台美術（装置・音響・照明・幕など）、出演キャスティングである。

第2は演出に係る分野で、演出部（稽古・演技指導・振り付け・殺陣・衣裳・鬘・ヘアー・履物・小道具・メイク）と、第1分野の舞台装置・音響照明のオペレーションを守備範囲とする。

第3は狭義の制作で、ロジスチック業務と呼ばれることもあり、資金調達、予算とスケジュール管理、広報プロモーション、チケットBOX管理、契約、交通・宿泊、観客・ボランティア対応など第1・2分野以外のすべてが含まれる。

（1） 作品創造[構成]

1）構成の考え方

全4幕11場で休憩を含み165分の楽劇となる。

生のプロオーケストラの演奏もとに群衆劇・ダンス・芝居・合唱が展開される和風オペラ（楽劇）となる。

各場面で劇の進行をナレーター役が登場して進行していく。

楽曲は松下功作品（一部笙篳篥曲を除く）を使用。

群衆は、コミネス混声合唱団員を含め一般募集の市民で構成する。

ダンスは、男性プロダンサー（女性ダンサーはプラネ）、日舞、白河踊りが挿入される。

台詞芝居は白河演劇塾生を中心に配役し、ナレーターは、当初歌舞伎役者や講談師などを候補に挙げていたが、最終的には若手の噺家、春風亭昇羊氏に決定した。

2）ストーリーライン

冒頭、和太鼓協奏曲『飛天遊』が林英哲によって戦乱の予兆・鎮魂として演奏される。

現代のお盆のシーンを挟んで戊辰戦争の始まった冬の京都の不穏な気配が描かれる。

京都鳥羽伏見から始まるこの戦役の全体を背景にしながら、3つのストーリーラインが設けられている。

その一つは《白河踊り》である。白河の盆踊りが、「白河踊り」として西軍の萩市や大垣市に伝わり今日踊りも踊り継がれている史実をもとに、戦乱の最中にも熱い人間同士の交流が、盆踊りの場面で暗示される。また「白河踊り変奏曲」が全編を貫く音楽・リズムのモチーフとなって展開する。

第2に一組の母子（ヨーコとシンイチ）が登場し、現代の白河から、150年前にタイムスリップしての戦乱の様子をつぶさに見つめる時代の証言者（観客の代表）の役として場面毎に登場し祖先を回想する。この母子は、両軍の血を分けた先祖を持つ人物という設定。

第3は、白河の地域に広く伝えられる戊辰戦争における民衆の戦死者の弔い方が現れる場面となる。「死者は敵味方なく神仏となるのではないか‥」といった古来の日本的な精神構造を、素朴な民衆の行為が地方弁でリアルに展開していく。

この3つのストーリーラインを流れる仁の心を表象する2つの合唱曲「甦（よみがえ）る」と「元素わたし（夢枕獏作詞）」が歌われる。

最終のシーンでは、再び林英哲の和太鼓で、物語全体を回想しつつ、鎮魂の読経とともに和太鼓で終わる。

3）4部構成＜起・承・転・結＞

起⇒第1幕・現代日本

和太鼓（林英哲）協奏曲と白河踊り+芝居

承⇒第2幕・京都鳥羽伏見の戦い

和楽器と日舞、群衆、新選組バレエ

＜休憩＞

転⇒第3幕・東北戦争（幕中での起・承・転・結）

戦闘シーン群衆芝居、東軍勝利の芝居・ダンスとバレエ、敗北と祈りのダンスとバレエ、世良修蔵の誅殺芝居、二本松の少年兵芝居、

結⇒第4幕・戦い終結と招魂碑・お盆

民衆の弔い、合唱、芝居、白河踊り、

ダンスとバレエ、和太鼓

4）脚本を巡って

作品制作にあたって筆者が最初に取り組んだのは、1867年大政奉還の翌年1868年から始まる18ヶ月わたる戊辰戦争の文献調査であった。

戊辰の役とも呼ばれる我が国の近世から近代に移行する重要な年で、東西それぞれの立場から様々な史観もあって全体像を把握し、本公演の物語を抽出するのに7～8か月を要した。新政府軍（西軍）と奥羽越列藩同盟軍（東軍）の戦いで、会津の白虎隊は有名だが「白河城攻防戦は、東北戊辰戦争の最初の本格的な戦いであった」ことは、筆者も白河に来て初めて知った。

はからずも京都守護職に任じられた松平容保が朝敵にされてしまう不幸や、錦旗に発砲した会津を倒すという大義も、実は「天皇の名のもとに統一国家を築く」という裏の大義（野望）が薩摩・長州連合軍側にあった、

また、奥羽諸藩は新政府軍と戦い政権を取るというよりは会津藩の赦免にあったなど歴史の詳細がみえてくる。

こうした史実の中で筆者の興味を引いたのは戦死者の慰霊についてであった。明治政府は「賊軍の死骸には手を付けるな」（こうした御触れは出されていないという異論があるが）という御触れが出され、慰霊祭で東京招魂社に合祀されているのは西軍の戦死者だけという事実であった。血沸き肉躍る戦闘場面は劇として作りやすいが、こうした戦死者の弔い方を劇に織り込めたいと考えた。それが〝死者を敵味方区別なく手厚く葬った〟白河の地に広く伝わる「仁」の心と思ったからである。

以上のような考えで梗概を筆者が執筆した。そして脚本家としては夢枕獏に依頼しようと企画していた。

夢枕氏は「元素わたし」という詞を松下功作曲で作っており、この歌は、さりげなく優しい言葉で「みんなわたしで みんなあなた」というフレーズで本楽劇の精神に通じている。本楽劇の挿入歌にふさわしいと考えた。このような経緯で夢枕獏への会見となった。

結果は挿入歌「元素わたし」の使用は了承を得たものの、脚本の執筆交渉は不調に終わった。夢枕によれば戊辰戦争は時代が新しく例えば西郷頼母など、今でもその係累も生きていて作品とするには扱いが難しいテーマだという理由であった。

福島を舞台とした能「鉄輪」をモチーフとした能楽的（演劇あるいは新作能）な舞台作品『（仮称）石棺』の構想をお持ちで、作品創造はゼロからの出発であれば作りたいとの希望であった。

この結果を受けて、改めての作家選定は時間もないことから断念し、筆者が自ら執筆することとなった。もう一件地元作家、白河有紀の『白河大戦争（旧題「渡河」）』が提示されていたが、この作品は場面があまりに多く音楽劇にするには難しいと判断した。

この本は、後に牧田純一脚本で、白河演劇塾の小ホール公演『渡河』として日の目を見ることになった。

（2）　作品創造［音楽］

1）作曲・編曲・指揮

作曲・編曲については、音楽監督と指揮を含めて筆者と何度か仕事を一緒にしてきた松下功を指名し承諾をいただき進めることとなった。しかし、当時東京藝大の副学長や日本作曲家協議会の会長を務める松下は大変に忙しく、新たな書下ろしは難しいと筆者は判断し、既存曲（和太鼓協奏曲『飛天遊』を含め、ストラビンスキーやワーグナーなども加えた楽曲）を場面毎にアレンジして使う案を氏に提示していた。

その楽曲選びや楽譜など音楽補を務めた高塚美奈子

の協力で使用楽曲詳細（案）を作成した。提示に対して松下の答えは曖昧であったが、これまでの経緯で進めてくれるものと判断していた。しかし、ことは簡単ではなかった。

ある日の打ち合わせで編曲やアレンジではなく「（後世に）残るものをつくるのでなければやらない」と言ってきた。「それは素晴らしいが、この時間で本当にできますか」と筆者も質したが「やる。」といわれたのでお任せすることにした。その後、作曲の進展を待ったが、一向に進んでいない、というより取り掛かっていない状況が続いたため、催促を行った。

その結果バレエ組曲『天の岩戸』やオーケストラ曲『夢の航跡』（いずれも松下作品）を提案されたので、示された既存楽曲を使って場面毎に当てはめる仕事を音楽補の高塚と行うことになった。最初の案は没になったのである。

ここでの教訓は、作曲家の矜持としては、編曲の是非を含め、他人の作品を取り込むことを良しとしない傾向がある。また、既存の楽譜の使用が権利関係で難しい場合があることに注意すべきである。

楽劇を上演にあたって音楽全体、特に振付で使う楽曲は、しっかり決まっていないと稽古に入れないという切迫した状況にあった。この間、松下からは台本ではなく脚本が欲しいという要求や、音楽の時間の設定要求がきた。制作側でも台本の手直しをしなければならない事情も重なり、全ての予定が大幅に遅れていた。

その後、2018年8月下旬になって、松下にようやく作曲に取り掛かる気配が見え、9月末にはすべて音楽完成の見通しが見えてきた。

その矢先9月16日に松下功の訃報（オーケストラの指揮中に倒れる）の電話が入ったのであった。あまりの衝撃でしばらく筆者は立ち直れなかった。

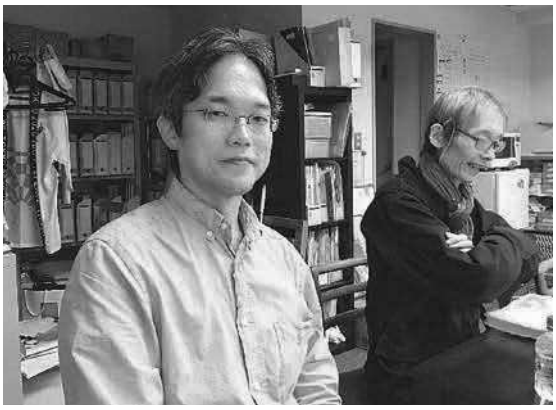

写真1:作曲家の川島素晴（中央）右は制作顧問の平井洋氏

2）作曲家の変更

松下功の急逝にどんな対応策があるのか緊急の会議が招集され、制作顧問の平井洋さんのもとで対策会議となった。このプロジェクトを中止するのか続行するのか、そもそも3月本番公演が可能なのか、判断が求められることになった。

国の助成金採択も決定し、実行委員会も始まっている。戊辰戦争150年の記念事業の目玉でもある。中止は何としても避けたかった。

著名な劇音楽の作曲家Mに相談を申し入れ、趣旨説明と作曲依頼を行ったが、「中止をすることもプロデューサーの見識」と諭された。あまりにも時間のないことが大きな理由であった。

その後、現代音楽と本企画の松下功氏の高弟と目される川島素晴に白羽の矢があたり、交渉することとなった。

お名前の通り素晴らしい才能をお持ちの作曲家であるが、切迫した時間で引き受けていただけるのか、受けていただいても期日までに楽譜を完成して渡してもらえるのか大きな賭けであった。

お会いした結果は、作品の趣旨を即座に判断し、「故松下氏の仕事であれば、引き受けないわけにはいかない。」との答えであった。

このような紆余曲折を経て、新な作曲家のもとで、本企画が進められることになった。2018年10月のことであった。その後の経緯はあまりにスリリングな展開で紙面に残すことはできない。

編曲を含めて以下の楽曲一覧のように、川島の手によってすべて完成したのは公演直前であった。幕毎の間奏曲は、川島がピアノ即興演奏を弾くということになった。

＜影向のボレロ　楽曲一覧＞

第1幕

第1場　M1 松下功：「飛天遊」

第2場　正調 白河盆踊り唄

第3場　M2川島素晴：ボレロa (白河踊り変奏曲)

第2幕

第1場　M3 雅楽「武徳楽」

　　M4 真鍋尚之：「笙と弦楽のためのレクイエム」

第2場　M5 川島素晴：ボレロb(白河踊り変奏曲)

第3幕

第1場　番号なし 川島素晴：ピアノ即興演奏①

第2場　番号なし 川島素晴：ピアノ即興演奏②
　　番号なし 川島素晴：ピアノ即興演奏③
第3場　M6-1　松下功：バレエ音楽「天の岩戸」より
　　“暴れる須佐之男命”抜粋
　　M6-2　バレエ音楽「天の岩戸」より
　　“暴れる須佐之男命”抜粋
　　M7　バレエ音楽「天の岩戸」より
　　“暴れる須佐之男命”抜粋
　　M8　川島素晴：「戦闘の悲劇」

第4幕

第1場　M9 川島素晴：ピアノ即興演奏④
第2場　M10 川島素晴：合唱曲「よみがえる」
　　管弦楽版
　　M11 志賀野桂一 作詞 川島素晴 作曲
　　混声4部合唱曲「よみがえる」
　　M12番号なし川島素晴：ピアノ即興演奏⑤
　　番号なし　林英哲による太鼓即興演奏、経文
第3場　M13 川島素晴：ボレロc (白河踊り変奏曲)
　　M14 松下功：「飛天遊」コーダ部分
　　M15 夢枕獏 作詞 松下功 作曲「平和ソング」より“元素わたし”

なお、作詞について夢枕にもう一作お願いしていたが、夢枕は作らないこととなり、衆議の結果筆者にお鉢が回ってきた。内容について詳しくとも、作詞など経験のない筆者は、歌うための韻を踏むことや言葉探しに大苦戦し、川島とのやり取りを含め8稿目でようやく完成した。

「よみがえる」という2つ目の合唱曲となった。

写真2:背景画「太陽と月の間」加川広重作

（3）　作品創造［舞台美術］

■巨大水彩画

戊辰戦争150年記念の舞台公演というお題をもらった筆者が最初にイメージアップした一枚の絵がある。

これは画家加川広重の巨大水彩画＜太陽と星の間＞（2009年/水彩）である。（写真2）

水彩画は、舞台照明との相性も良く、ライトを当てた際の発色が素晴らしい。

この巾16.4m高さ5.4mの巨大画は、彼が東日本大震災以降4枚の具象画を表し、震災画として、名声を博する以前に描かれた作品で、大震災の予兆画とも受け取れるような凄まじい風景画である。

一本の松だけがこの世であることを伺わせるがその他は赤く大災害か戦災の跡のように焼け爛れている。戊辰戦争では東北最大の戦闘が行われた白河であるが、東軍の敗北の象徴と谷田川が死体で赤く染まった風景に見えなくもない。

また題名が示すとおり宇宙的な構図が、人間同士の戦いを超えて存在する普遍的な何かを浮かび上がらせる背景となるのではないかと感じた。

筆者にとって、この巨大画との出会いと、林英哲の和太鼓が筆者による舞台構想のすべての＜起・結＞点となった。

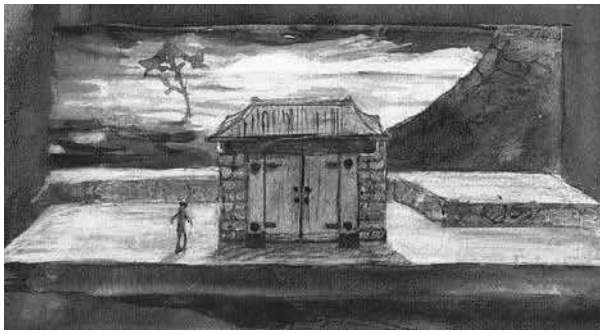

写真3:舞台スケッチ:加川広重

（4）　演出部［舞台装置］

舞台の基本構造は、構想を温め始めた2年前にほぼ完成した。（写真③参照）

能舞台の変形という構造で上手に張り出し舞台、後方に橋掛かりともいうべき一段高い廊下のような通路が通っている。

大道具としては大門、書き割りの城、塀、モヤ（植栽）などシンプルな造りとした。これらの彩色は画家の加川にお願いした。

橋掛かりのケコミ部分には黒紗幕で目隠しすると同時に

石垣の書き込みをした。ケコミを紗幕にした理由は、その背後にLED照明をフットライトで仕込み、戦闘シーンで砲弾の爆発などを表したかった。

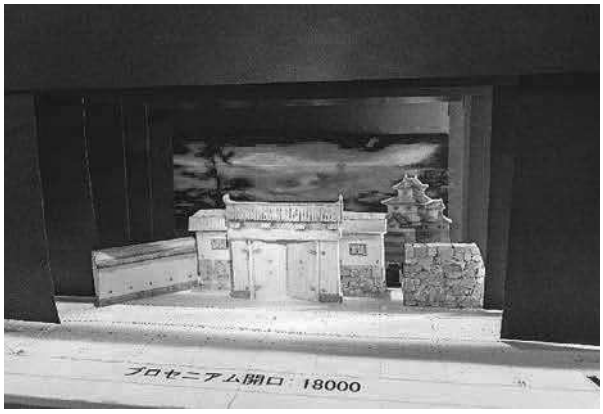

写真4:『影向のボレロ』舞台装置模型

一番大きな大門の出し入れと置き方で場面を転換させることとした。櫓と招魂碑も可動式で演出の幅を広げた。以下が主な仕様である。

1）大道具

野外用能舞台を使用（実際は既存の開き足や平台で対応した。）、加川巨大画使用、床リノリウムを張る。金屏風、松羽目等コミネスの道具を援用する。

① 大門：構造体はイントレ、装飾を施す。H4500×W4500×D900　動かせるように車、ストッパー付

② 櫓兼城壁：側面も装飾を施す。H4500×W900×D900‥2台　動かせるように車、ストッパー付

③ 門扉：H3600×W1250×D50…2台　動かせるように車、ストッパー付

④ 墓碑：H4500×W450×D450…2台　動かせるように車、ストッパー付

⑤ ケコミ兼用石垣：H600×W1800×D50…10枚
同ケコミ兼用石垣:H600×W900×D50…4枚

こうした仕様を大道具に発注した。実際に模型で見え方を検証し、櫓と大門のサイズを変更した。画家に美術を依頼することで、背景画との調整やどの程度の具象性で作るかなど、細かな要求にも丁寧に答えてもらうことが出来た。

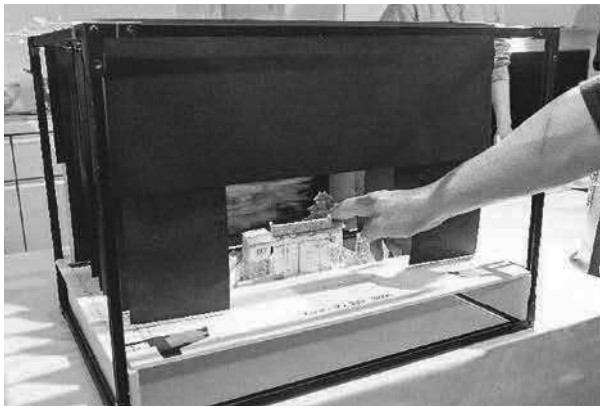

写真5:『影向のボレロ』舞台装置模型

2）衣裳・小道具

衣裳や小道具ついては、制作費に大きく影響する部門で、仮に衣裳製作を新規で行った場合、150名の出演者では@2万円/人としても300万円が必要となってしまう。着物などは10万円を超えることも稀でない。したがってこの部門の物の調達には気を使うのである。

本楽劇では、地元の大いなる助けをもらっての制作となった。中でも和装の着物・帯など大量の着物（それも加工しても構わない物）の提供がありがたかった。

また戦闘シーンのリアリティを確保するには本物の道具が欠かせない。東軍が使う甲冑など外注レンタルで高くつく道具が、地元の「白河歴史文化協会　手作り甲冑塾」という団体や「会津まつり協会」の協力をもらうことができた。

こうした協力にも関わらず想定外の銃や兜など借り上げや、制作物が増え、物の種別は多岐にわたったのである。

① 陣羽織…実行委員会で制作した羽織を　借用、+何着か制作（仁マーク）裏地を3色（緑・紫・柿色）も検討する。

② 旗指物…制作

③ 官軍用衣裳…学生服[黒に赤のテープなど　縫い付ける]または類似の衣装を検討する

④ 鎧兜及び西軍兵士用兜（△）…（レンタルまたは制作）

⑤ 民衆用浴衣…各自持参のもの

⑥ 鉢巻等小物…制作

⑦ 銃…スペンサー銃（レンタル）、火縄銃

⑧ 刀剣類及び槍・弓矢…（レンタルまたは制作）

⑨ 指揮棒…（レンタル）

写真6:東軍兵士用の甲冑

写真7:刀とスペンサー銃

3）音響・照明

業者委託による部門であるが、白河地区には専門業者は音響専門があるのみで、照明などは郡山、福島、仙台、東京方面からの出張扱いとなる。委託費に旅費・宿泊・日当が加算されるのである。

地方公演での創作舞台制作のネックともなる業者不足は、我が国の構造的課題である。また、祭りなど野外での仕事に慣れていても、舞台公演での繊細さを要求する公演では必要なノウハウが全く異なるのである。

そのような理由で、公演の直前まで手直しの連続であった。幸い音響・照明・特殊照明の各業者さんの粘り強い対応で、何とか本番が完成形に達した。

音響は主要なキャストはピンマイクを付けることになったため、その脱着、出のタイミング、音量など、すべての人毎に違いがあり調整は難しかった。合唱団用の歌のマイク設置と調整は経験値もあってうまくこなせた。

照明は、会館の電源容量いっぱいに使用したこともあり直しの制約があった。

稽古である程度の立ち位置の確認をして進めるが、突発的に立ち位置変更や、動きに対応が充分にいかない場合が出てくる。またムービングライトは、光量の問題や、仕込み変更に時間を要するなどの課題がある。レーザーの使用もあって光源を見えなくする注文や、直前まで使用できなく、振り付けに対応させられないなど細かな課題も多々あった。

演技を省略して技術部門を中心としたリハーサルを「テクニカルランスルー」と言うが、この時間をしっかり設け相当に余裕のあるスケジュールを組んでいたつもりであったが、それでもぎりぎりの状況であった。幕の上げ下げも加わって、スモークの出すタイミング、煙がたまるタイミングなど台本に書き込めないほどの細かなQが必要となる。場当たり時に音響と照明がすべて準備済みで連動してチェックするのが理想だが、今回そこまでの余裕は持てなかった。

本番前日23日のGPが客を入れての公開で行われ、実質本番であった。公演としては緊張感もあり本番のつもりで出演者は演じたこともあり、観客の皆さんからは好評価を頂いた。しかし、このGPは裏方が火の車状態にあって、ようやく全体を通せたというのが制作側の本音であった。

（5）　演出部 [演技・振り付け・殺陣]

演出部を構成する筆者を含め7名の集団指導体制を敷いて進めることとなった。以下部門ごとの担当者の名前である。

本楽劇では、音楽劇として物語の筋や時代状況(場面説明)はナレーションにゆだね、劇はポイントとなる部分で臨場感を出す。音楽に合わせた群衆の動きを劇とダンスで表現し、さらに場面の感情をバレエで表すという方針で演出に臨んだ。

この大方針のもとで、それぞれの専門性を最大限に発揮してもらうための演出部の構成であった。途中経過の中では、意見のぶつかり合いもあったが、それを乗り越え、結果は筆者が想定した以上のパフォーマンスを見せてくれたのである。

■指導陣

◆構成台本・演出：筆者

◆演出補：十文字律子（演技指導・劇演出）
◆演出補：中村明日香（群舞振付・指導・群舞演出）
◆バレエ振付：鈴木寿雄（バレエ指導）
◆バレエ指導：鈴木麻矢
◆殺陣指導：金澤眞
◆合唱指導：堀内由起子

稽古については、直前のリハーサル・場当たりを除く部門毎の回数が以下の結果となった。これ以外民舞愛好会の踊りの稽古や、白河踊りに伴う太鼓隊の稽古、笛の稽古などが、それぞれの稽古場で行われた。

筆者は常々「自主事業で創作系事業と買取り公演（プロモーターからの買うパッケージ公演）とで比較すると、創作系事業は100倍の手間暇がかかる」と主張しているが、この数字をみると本当に実感するのである。

■稽古回数（部門別）

合　唱　… 9回
演　劇　…27回
殺　陣　…15回
群　舞　…32回
バレエ　…12回
合　計　…95回

バレエ・ダンス部門は、楽譜の出来上がりが遅くなったため、稽古に入れない、やむなく既存曲のCDを使った稽古になった。また現代曲でカウントが撮りにくいなど様々な問題が起こった。特に群集や、民舞愛好会の稽古は人数も多く欠席者もいることから、振り付けの熟達度に差があり、これを稽古動画に撮って、欠席者に渡し、自宅稽古を促すなどの方法をとった。

写真8:十文字律子による演技指導

演劇部門では、演技指導の十文字律子が任にあたり、彼女は白河演劇塾を率いる演出家でもあって、脚本や台本に対して貴重な意見・提案をしてくれた。

現代と150年前の世界を往復する重要キャストの和知母子は、日頃の修練や才能もともなって、申し分のない演技であった。実の親子である2人の演技が、楽劇の温かさを体現していた。

筆者のメッセージはこの母子とナレーターの春風亭昇羊の台詞に多く込めたつもりだが、実際、昇羊氏のご先祖が長州藩士の山尾庸三であった事実は聞いて驚くとともに、演出を超越して本楽劇の因縁を感じる出来事であった。

稽古を重ねる中で、台詞の変更などが多く、十文字の指導で進められた。

写真9: 中村明日香による振り付け稽古

脚本側と演出側との解釈や考えの違いなど細かな部分でも調整に時間が費やされることとなる。稽古の考え方も演劇系とダンス系、音楽系の習慣の違いは大きく、稽古時間の管理が難しく、大幅に計画を超えた時間数となった。

また、役者の空間認識については、プロアマの違いがある。素人の稽古ではこのことが会得できにくい。絵コンテだけで道具のリアリティはなかなか掴めない。背景画の意味性や色の変化など演技と空間を一体として感じ、演じるべき内容が多々あったが、道具搬入までは、イメージを共有が難しかった。また、視認距離の遠い大ホールでの演技と、小ホール系の演技ではおのずと変える必要がある。大ホールに出演者が慣れたのは大道具がセットアップされた本番直前になってからであった

■バレエ

鈴木寿雄が指導するバレエは、プロのダンサーと地元女性ダンサーとが出演した。筆者はイメージとしてモーリス・ベジャールの『カブキ』などがヒントである旨を告げておいた。稽古はバレエ教室（プラネ）で基本仕上げてから合同稽古に持ち込む方式であったため、比較的順調に進行したと考える。

しかし出ハケやポジション取りを音楽に合わせ厳密に決めていくのがバレエで、オーケストラの生演奏が直前であったため、合わせるのが大変であった。

また、大道具によっての制約や、戦死者を縫って演じる場面など、普段のバレエ公演にはない舞台セットに苦労があったと思われる。鈴木氏は長年地元でバレエ教室を開き振付のベテランでもあり、台本に即して作り上げてきた。直前の筆者の手直し要求にも即座に対応してくれた。

また、バレエの衣装は足の動きを見せなければならない芸術のため独特の衣装となる。以下のプランで行った。

写真10:第4幕　バレエダンサーの踊り（中央）

＜ダンサー衣裳プラン決定＞

■ダンスC（6名）…プラネ女性6名（ピンクタイツ上・下＋着物加工＊着物を加工・下部をカットしパンツ形式に）

■ダンスD（5名）…バレエダンサー男性5名（黒タイツ上・下＋新選組・羽織（青）＋鉢巻）

■ダンスE（5名）…バレエダンサー男性5名（黒タイツ上・下グレ＋陣羽織・帯加工＋鉢巻）

■ダンスF（10名）…バレエダンサー男性5名（黒タイツ上・下＋陣羽織・帯加工＋鉢巻）プラネ女性5名（ピンクタイツ上・下＋陣羽織・帯加工＋鉢巻）

■ダンスG（5名）…バレエダンサー男性5名　黒タイツ上・下＋甲冑＋下着（白）＋鉢巻

■ダンスH（6名）…プラネ女性6名（ピンクタイツ上・下＋着物加工）＋上着（要検討・止めるかも）

■ダンスJ（11名）…バレエダンサー男性5名（黒タイツ上・下＋陣羽織・帯加工））、プラネ女性6名（ピンクタイツ上・下＋陣羽織・帯加工）

■殺陣

今回、戦闘場面で銃器、刀剣が使用されるため、殺陣の専門家を招へいし、稽古をつけてもらった。役者や兵士役、群衆などが基本動作を学ぶことで演技のリアリティが格段に向上した。

写真10・11:金澤眞による殺陣の稽古

写真12:第3幕　白河口での戦闘シーン

指導の金澤眞には出演も依頼した。指導者と出演者との2役は、気持ちの置き方が異なり、本人は大変ともらしていた。その存在感はさすがのものであった。

写真13:殺陣指導の金澤眞 出演では西郷頼母役

群衆の動き・ダンスと振り付けは中村明日香が担当し、一番多くの時間をかけて稽古がなされた。中村氏の熱情と献身的に稽古に立ち向かう姿には、スタッフも出演者も動かされ、群衆の躍動する動きが創られていった。本楽劇の熱量を高めたのは中村の功績である。

写真14:第3幕の稽古をつける中村明日香

(6)　制作

1) スケジュール

2017年は前期に脚本制作のための文献調査や梗概(素案)の執筆、企画書を基にした市役所との協議、同時に主要キャストへの打診、有識者の意見聴取などを行った。後期には、指導者などを決め国への助成申請のための企画書づくりに着手している。以下のグランドスケジュール(案)は、事業公演する年度のものである。2018年

4月　楽劇ミーティング①　関係者への挨拶まわり・連絡、部門ごとの責任者、キャスティング、予算の検証、スケジュールの確認、台本の考証と修正、東京組への挨拶まわり、契約の段取り、広報計画、共催者(民報との打ち合わせ)応援団の結成

5月　楽劇ミーティング②　部門ごとの指導者体制の検討、確立、依頼事務、演出プランの提示と大道具の検討・発注、照明・音響プランの業者選定、大道具模型の制作、検討手直し、音楽作曲進捗状況の確認、ダンス部門(キャスティング)役者部門(キャスティング)、ナレーターの検討と依頼、衣裳部門の検討、履物、被り物、小道具等の検討、

6月　楽劇ミーティング③　部門ごとのミーティングスケジュールの決定、技術系の業者契約、広報デザインの検討・発注、音楽の検討、楽譜の制作、デモCDの制作、東京ミーティング

7月　楽劇ミーティング④　第1次広報のリリース(7月14日に合わせる)音楽の完成と、デモCDの関係者への配布、部門ごとの稽古計画、後援依頼、舞台進行表[香盤表・Qシートの制作]

8月　楽劇ミーティング⑤　市民リクルート(群衆)のための印刷物の制作・配布

9月　楽劇ミーティング⑥　広報計画の具体化、　部門練習(ダンス部門、群集劇部門、演劇部門、)、群衆の募集と説明会の開催、協力団体への依頼、舞台進行台本の完成、小道具の調達計画と実施、

10月　楽劇ミーティング⑦　チケット広報開始、広報印刷、配布計画、SNS対策、団体チケット販売プロモーション、プレ企画、東京ミーティング
部門練習(ダンス部門、群集劇部門、演劇部門、)

11月　楽劇ミーティング⑧　一般チケット販売開始、部門練習(ダンス部門、群集劇部門、演劇部門、合唱部門)プレ企画

12月　楽劇ミーティング⑨　部門練習（ダンス部門、群集劇部門、演劇部門、合唱部門）照明・音響プランの完成、プレ企画、東京ミーティング

2019年

1月　楽劇ミーティング⑩　部門練習（ダンス部門、群集劇部門、演劇部門、合唱部門）大道具の制作、

2月　楽劇ミーティング⑪　部門練習（ダンス部門、群集劇部門、演劇部門、合唱部門）プロモーションのためのプレ企画の実施、

3月上旬　楽劇ミーティング⑫

部門練習（ダンス部門、群集劇部門、演劇部門、合唱部門）　各部門の仕上げ

3月17日　練習（各部門合同ミーティング）

3月18日　仕込み（大道具）・照明・音響

3月19日　テクリハーサル、ダンスリハーサル

3月20日　リハーサル

3月21日（祝日）　総練習

3月22日　リハーサル

3月23日　GP　13:00開場　13:30レクチャー　14:00GP開始

3月24日　本番　13:00開場　14:00開演本番　各種支払業務、バラシ

3月25日　撤収・運搬

実際の進行は、項目によって異なるが、稽古などは1月以上遅れて始まった。

2）広報・プロモーション

本楽劇がどの様に広報し、ブームアップしていったのか、その戦略・戦術を検証してみる。

筆者は基本認識として、従来型のポスター・チラシだけでは人は動かない。SNSの戦略が緻密に必要、媒体の活用、有効な読者招待、プレ企画の工夫、アーティストの活用、人から人への口コミは重要、食や物販との組み合わせ、スピードと話題づくり、雑誌等早目のリリース、記事体の広報などが大切といった考えを持っているが実際は、限られた資源をフル稼働させるしかなかった。

そんなわけで、新聞・雑誌・SNS・HP・紙媒体など一通り使える手段はすべて網羅して広報に努めた。市役所の広報も全戸配布という強みがあって、小都市ならではのきめの細かな広報を展開してくれた。

■券売の戦略・戦術

タレントやスターを使わないキャスティングで、どのようにチケットを売っていくのかは大きな課題であった。そこで、戦略は、

① 市民総参加型で参加者による訴求を行う。

② 戊辰戦争150周年の歴史的記念事業で、その組織をフルに使って訴求する。

③ 市内の子どもたちに公開GPに招待、その広報を援用する。

④ チケットを買いやすい値段に設定する。

⑤ 新聞社(民報)と共催し詳しい記事で訴求する。

など5点であった。筆者の評価は、①③④はかなりの成果を上げたが、②と⑤は想定した効果は思ったほど出なかった。また、音楽家の交代や和太鼓奏者の林英哲といった出演タレントの訴求力も後半で利いてきたように思う。

また、タイトルの難解さは、当初マイナスに働いたが、説明するほどに楽劇内容との結びつきが得心されていき「なるほど感」が出来て「行ってみよう!」という動機づけを形成するキーワードとなった。

戦術的には、定期的に応援組織の制作委員会を開催（写真15）し、逐次経過をお知らせし、口コミでのブームアップを浸透させた。

ブームアップのために2つの企画を進めた。1つは作曲家の招聘で今回制作中途での音楽監督兼作曲家の交代劇を前向きにとらえ、新進気鋭の川島の記者会見を市長交えて実施した。（写真16）

2つ目は林英哲の事前招聘である。林は和太鼓の今日的な奏法を編みだした原点となる和太鼓奏者であり、ニューヨークやベルリンでも活躍する和太鼓界のレジェンドである。林の半生を聞く会となった。

戦略の②の関連では市内小中高生にGPを鑑賞してもらうためのアクションであった。次世代の子どもたちに地域の歴史を扱った楽劇を観てもらうことは、企画の大きな目的の一つである。教育委員会を通して、呼びかけたが、春休みの本番日でもあり、多忙な学校の先生方に協力を求める難しさも実感したところである。

写真15:音楽監督川島素晴を迎えての制作委員会の様子

写真16:記者会見で志賀野(左)、鈴木和夫市長(中央)、川島(右)

次に広報で用いたキャッチフレーズを見てみよう。

新作楽劇「影向(ようごう)のボレロ」

- ●白河戊辰を題材にしたコミネス初の大型音楽劇
- ●楽しく、ためになる、白河市民必見の歴史物語
- ●現代の母子が見つめる、戊辰戦争の真実
- ●プロオーケストラや、和太鼓のレジェンド林英哲が出演する壮大な舞台
- ●創作途上で急死された松下功を引き継いで高弟の川島素晴が作曲と指揮をする話題の新作音楽オペラ
- ●バレエダンサー・芝居・大合唱、若手落語家によるナレーションなど話題満載の楽劇
- ●戊辰戦争150年を記念する、年度最終の舞台お見逃しなく!

＊「影向」‥神仏が仮の姿でこの世にあらわれる様、白河の人々が戊辰戦争で両軍の戦死者を分け隔てなく弔った史実にちなんでこの題名としている。

■デザインコンセプト

広報では、チラシ、ポスター、新聞、雑誌、各種媒体への総合的なプロモーションをかけることにし、そのビジュアルデザインは統一する。

題字を筆文字にして、東西両軍を代表する刀とスペンサー銃を向い合せる。背景画のイメージや舞台美術の絵コンテ、奥羽列藩同盟旗、招魂碑、そして林英哲の大太鼓を配置する。また、地紋は、天空から先祖のメッセージを表す光のラインを紡錘状に入れた。ポスターはチラシの白ではなく黒に反転させた。(写真17・18)

写真17:チラシデザイン

写真18:ポスターデザイン

■プログラム

楽劇挨拶プログラム文案として筆者は、以下の文案をつくった。

「歴史とは物語なのです」

白河のまちを案内されている時、初めてお聞きした話が、戊辰戦争白河口の戦いについてでした。その後、新会館コミネスの初代館長に就任し、南湖や小峰城、祭りや踊り、お茶やお蕎麦など様々な生活文化に触れていく中、新しいホールにふさわしいオリジナルな舞台作品を創らなければならないと強く考えるようになりました。

パリの友人Sが「フランス語でHistoire(イストワール)《歴史》は《物語》と同じ意味なのよ」と教えてくれました。

この言葉を便に、戊辰に関する本や資料を読み始め、2年がかりで舞台の展開イメージを固めました。戦争の《理》を語れば諸説あり、また立場によって折り合いの付かない《義》もあります。たどり着いた言葉がタイトルになった「影向（ようごう）」でした。白河の人々が両軍の戦死者を敵味方なく手厚く弔った姿が強く心に残り「影向」という言葉に凝縮しています。この物語は戊辰という戦乱を背景に「愛と平和」をテーマに、人間の《情と縁》の不思議を描いた物語となったと思います。

音楽は急逝された故松下功氏 の後を受け継いで、音楽監督を川島素晴氏がお引き受けいただき、この楽劇テーマにふさわしい現代人の心にも深く染み入る作曲・編曲をしていただきました。

また、しらかわ演劇塾、地元バレエ団プラネ、コミネス混声合唱団、白河民舞愛好のみなさん、一般公募の市民の方々など、文字通り市民総参加の音楽劇です。存分にお楽しみいただければ幸甚です。

■追加のご案内

券売が伸びなかった時期に以下の文案が出された。

白河戊辰150周年を記念した市民総参加楽劇

ご協力依頼　各位

日頃より、白河文化交流館コミネスをご利用、ご愛顧いただき誠にありがとうございます。コミネス開館以来、白河市域の文化振興・まちづくりに寄与すべく、日々邁進しているところです。

この度、白河戊辰150周年を記念し、市域に伝わる文化資源を活用してオリジナルな楽劇を構想し、「影向のボレロ」（ようごうのぼれろ）というタイトルで29年度末に公演する運びとなりました。白河から内外に発信する質の高い舞台公演計画を認められ、文化庁からも「文化芸術拠点形成事業」として助成採択を受けております。

具体的には、劇として1868年の史実を描き、作曲を、日本の現代音楽を代表する松下功（氏は東京藝大副学長、今期9月に急逝）に依頼し、その後川島素晴氏に引き継いでいただきました。震災復興を機に創られたプロオーケストラ「福島フィルハーモニックオーケストラ」が演奏を務め、世界的な和太鼓奏者の林英哲が協奏曲を奏でます。　加えて地元から混声合唱団、演劇塾、民舞愛好会、公募の兵士・民衆など幅広い年齢層の市民が協働で創り上げる＜市民総参加の楽劇＞となっております。

白河で2年がかりで制作してきた特別な舞台公演でありますが、市民への浸透度がまだまだ十分ではない状態です。そのようなことから、多くの方々に観て聴いていただきたく、ご協力を賜りたくご依頼申し上げます。（文責:河原田東司）

このようにプロモーション活動を多様化させ広報に努めた。最初の3か月間はチケットの売れ行きは芳しくなかった。年末から年明けにかけて、社会奉仕団体ロータリークラブやライオンズクラブ、医師会など団体にお邪魔して、作者でもある筆者が本楽劇の意義と内容を説いて回った。

これらの広報と販売活動は、最後に実ったのである。

販売できるチケットは完売となった。

写真19:満席の仲でのカーテンコール

(3)　市民参加・創客

市民総参加型舞台公演と銘打って始めた本楽劇において、市民の参加をどのように進めたのかをみてみよう。

「市民参加」と言っても2つのカテゴリーに分けられる。ひ

とつは舞台に上がる側の人々(市民)のリクルートであり、裏方の手伝いもこれに含まれる。もう一つは観客であり、《集客》という言い方もあるが、筆者は《創客=観客開発audience development》という言葉を使っている。この創客は、既存の舞台芸術マーケットの愛好家という範疇を越えて今まで観客として補足していない層に対してもアクションをかけていくといったポジティブな意味が込められていると思うからである。

■出演者のリクルート

兵士役や、群衆、盆踊りの踊り手など市民をどの様にリクルートするのか大きな課題があった。

兵士役は若い人が必要だったので、地元青年会議所や商工会議所青年部の人々、提灯祭りの参加者など、当てになるものと考えていた。募集をかけてみると2人という報告であった。そこで追加の募集案文が以下である。

「戊辰戦争150周年記念事業」の集大成として、制作する新作楽劇・一大オペラ(作品)です。当時の白河の人々の生き様や仁のこころを、音楽とダンスで再現します。端に東軍・西軍の闘いを描くだけではなく、人の愛や交流の大切さを感じさせてくれる舞台となっています。

これまで作曲家、ダンス振付家、オーケストラなどの専門家と打合せを行い、準備を進めてきました。とてもスケールの大きな歴史物なので、大勢のキャストが必要です。そのため、プロと共演する兵士役や民衆役の公募を継続しています。舞台に出るのが初めてという人も歓迎です。舞台から客席の眺めは格別です。一度体験してほしいと思います。人生が変わります。練習日程などコミネスにお問い合わせください。

地方都市の場合、強固な地縁・コミュニティが存在しており、公募というフッラトな形式では人が集まらないことを肝に銘じなければならない。人を介したお誘いでようやく人々は動くのである。直接の交渉で、白河青年会議所のメンバーが協力してくれた。

群衆は、コミネス混声合唱団と民舞愛好会の皆さんにお願いした。80名の合唱団を動かすにあたって代表の浅川なおみの力量に頼ることとなった。盆踊りについては、太田かずえの協力を取り付け、そのお力で、子供を含む約30名の参加が実現した。

写真20:コミネス混声合唱団の練習、指導は川島、堀内由起子

■白河踊り

ここで、本楽劇においてストーリーラインの一つとなった白河踊りについてのべておこう。

白河で今現在行なわれている盆踊りは明治期に創られた新しい踊りに替ってしまっている。伝承された旧盆踊りを唯一今に残そうとしているのが、前述の「白河民舞愛好会(代表:太田かずえ)」である。

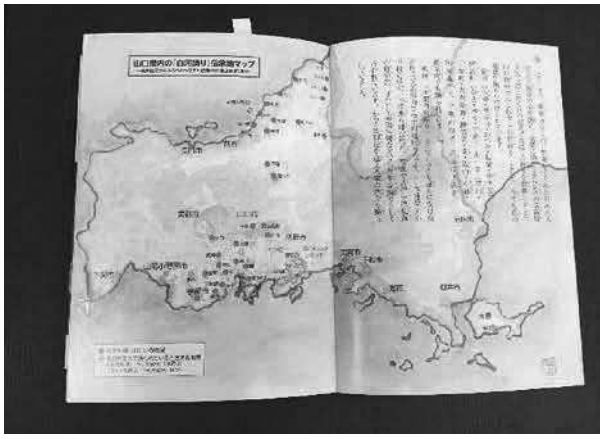

写真21「白河踊り」が山口県に広く伝わっている解説のページ

本楽劇で正調「白河踊り」として盆踊り場面が描かれるが、この「白河踊り」こそが、敵方(東軍から見て)に伝わった白河踊りである。

この白河踊りを研究した中原正男という研究家(萩市の建設業68歳)が、戊辰戦争(1868年)に参戦した長州藩士によって福島県白河市から山口県に伝えられた「白河踊り」を10年がかりで調査し、その成果を著書『白河踊り』〜奥州白河からふるさとへ伝えた盆踊り書肆侃侃房で表している。

これによると、岐阜県南部の5地区、山靴県内80を超える地区で『白河踊り』または『白河音頭』などの名前で伝えられ、今にして踊り継がれているという。驚くことに、「白河踊り」を後世に残すために「白河踊り保存会」が、阿武郡阿武町や、山口市平川地区にできていて、毎年盛大に「白河踊り」が踊られている。2009年には宇部市にも「白河踊り保存会」が発足したという。

「白河」が「白川」となったり、踊る方向が反対であったり、掛け声が白河市では「イヤハー」「ハアハー」から始まっているのに、山口県内は「ヤンサエー」「ヤレサー」など変化しているのであるが、中原の採取した緻密で膨大な伝承記録をみると、いずれも福島県白河市にあった「盆踊り」が伝わった踊りであることを否定できないのである。

中原は「これだけの地域に《白河踊り》を持ち帰るには、一地域に複数の人間が持ち帰ったに相違ない。歌詞は字の書ける者に書き取ってもらえるが、曲と踊りは身体で覚えて帰るしかなかった筈だ。武士だけでなく農民や町人達も参加した奇兵隊をはじめとする諸隊。死と背中併せの戦争の中での《白河踊り》は、束の間の心休まるひとときだった事に違いない。」と述べている。

筆者は、この伝承を戦乱の最中においても地区住民と新政府軍・軍属の人々との熱い交流があった証と考えたのである。

■創客（観客開発audience development）

舞台芸術分野の観客開発には、以下の課題を頭に入れる必要があると筆者は考える。

○舞台公演という特殊商品を扱うことを知る。
○チケットを売るのではなく習慣を売る。
○会館のファンを創る。
○市民の社交・交流の場とする。
○居場所を創る参加システム。
○話題を創る。

タレントやスターを使わないキャスティングに加え、現代音楽の新作楽劇という最も販売が難しい挑戦がこの公演であった。

白河文化交流館では、開館以来、白河版『魔笛』や、スペースオペラ『KEGON』といった創作系の舞台制作を行ってきた。そうした中で、〝コミネスのある生活〟というキャッチフレーズで、友の会の会員組織もしっかり出来上がり、創客には一定程度成功している。

しかし、6万人の人口規模の都市ということもあり、マーケットの規模は大きくはない。コアなファンはできたが、年齢構成からすれば、高齢者に偏っている。これを広げていく方途は、より広域からの誘客と、年齢層の拡大が求められるのである。

小手先の方策ではなく、筆者は長期戦略としての創客が大切と考える。特に次世代の子どもたちへ生の舞台を組織的に見せる、聴かせる。それも教師に負担をかけないで、共感関係を形成することが重要と考える。

このことが将来の創客につながるのではなかろうか。

写真22:冒頭の林英哲の和太鼓

4. 台本『影向のボレロ』

【全4幕　11場】

▶舞台はオペラカーテンが下りている。緞帳DN、紗幕DN

≪プロローグ≫

ナレーション（表）

「「敵」とは何か、「味方」とは何か。みな同じ同朋（どうほう）ではないのか。そして、どんな状況でも、人間としての「愛」や「縁(えにし)」は連なりくりかえす。

1868年（慶応4年）1月3日、京都郊外の鳥羽・伏見での勃発。そして1869年（明治2年）5月18日榎本武揚(えのもとたけあき)軍が、新政府軍に降伏する18か月にわたる戊辰戦争。これから始まる物語は、その戊辰戦争を背景とした、『人の仁を問う物語』である。

戊辰戦争は、武家社会から近代社会への時代の大きな

変革期の内戦とされ、京都・江戸・北越・東北・北海道 箱館(はこだて)と、広域にわたる戦いでした。《薩摩・長州・土佐連合軍》対《奥羽(おうう)越(えつ)列藩同盟軍》との覇権をかけた戦い。近代兵器・戦法と旧式兵器・戦法の戦いという見方もある。加えて、この戦いが、日本人の神仏に対するおおらかな宗教観を変える節目となったことを忘れてはならない。

この間の戦死者は、東軍8,625名、西軍4,974名で総計では13,000名を超えると伝えられている。

西軍は靖国に合祀(ごうし)され、東軍の戦死者の多くは弔われることなく、埋葬もされず屍となった。彷徨った魂は幾ばくか数知れない。

しかし、古代よりの八百万(やおよろず)の神や輪廻転生といった日本人の死生観は民衆に生き続けている。

「死んだら仏だ、敵も味方もない」そうした素朴な民衆の心情によって、両軍の戦死者が平等に弔われた(唯一の)戦場があった。

それは戊辰 東北戦争、最初の本格的な攻防戦が行われたこの地「白河」であった」

プロローグ中に林英哲と太鼓(引枠)、舞台中央に板付き。

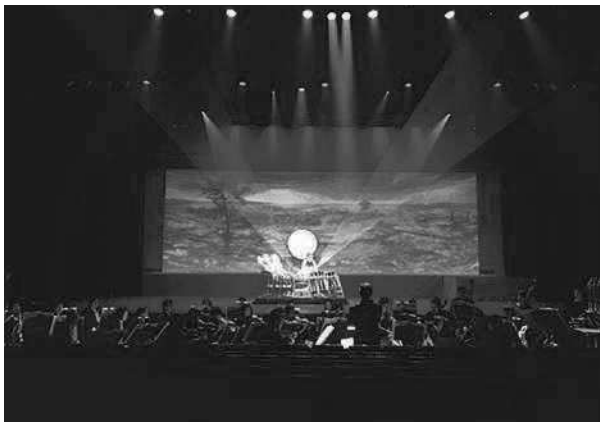

写真23:林英哲の和太鼓『飛天遊』

第一幕　現代日本　30分

第1場　戦いの予兆・招魂…10～15分

緞帳UP

▶紗幕UP、照明IN:青系のレーザー+ムービング

▶青に染まった背景の巨大画が浮かび上がる

♪①IN…「飛天遊」(松下功作)…10～15分

[演奏:林英哲+福島フィル]※演奏のみ

(♪①OUT)

暗転幕DN

▶演奏明かりFO、紗幕DN(暗転)。

▶消し黒幕DN。

▶太鼓引き枠下ハケ、墓標(題字は招魂碑)を舞台中央へ設置

写真24:白河の盆踊りのシーン

第2場　現代、白河のお盆(季節は夏)…5～6分

○ 大勢の民衆が客席、上下から浴衣姿で舞台へ動いていく場面。

○シーン途中、遠くから正調白河踊りが聞こえてくる(歌なし演奏)。

暗転幕UP

▶奥に墓標らしきものが浮かび上がる。

浴衣姿の民衆が三々五々、蝋燭(LEDランプ)を持ち、おしゃべりをしながら墓碑(招魂碑)に向かって手を合わせお参りしていく。

ナレーター(上手／下手)より、和装(紙芝居のおじさん風スタイル)で登場。

紗幕UP

ナレーション「夏になると新盆を迎えた家々、近所の人びとが浴衣を着て三々五々集まってくる。故人の供養をする年中行事だ」

○大勢がお互い世間話をし、和気藹々としながらお参りしている。

中年女A(民衆)「お宅のおばあちゃん　その後足治った?」

中年女B「うーん、良くなったけど 今度は腰痛いって。まあ、歳だからね」

中年女A「そうね。うちの爺さんは朝から野球に行ったよ」

中年女B「元気でイイねぇ」

中年女A「ご飯まだか まだかってうるさいの」
中年女B「え～。少しきてるんじゃないの?あれ」
中年女A「認知症?」
中年女B「そう、それそれ‥」

女子高生たちが会話している。
女子高生A「その浴衣、マジいい柄～」
女子高生B「3千円ってヤバくない?」
女子高生C「この町だと、服買うの悩むよね～」
女子高生A「どこで買ったの?」
女子高生B「イオン」
女子高生C「だよね～。私も下駄買ったのイオン」
女子高生D「ごめ～ん!おまたせ～」
女子高生A「ったくも～。遅いぞ!」
女子高生D「ゴメンってば。マックおごるから」
女子高生B「んじゃ許す。あ!帯カワイイね!!」
女子高生D「これバアちゃんのだったの。ヤバくない?」
女子高生ABC「ヤバ～イ!」
女子高生C「日本の着物って結構ヤルよね～‥」

お爺さんとその孫の会話も見える。

お爺さん「そのゲーム面白いか?」
孫1「えっ」(爺さんのほうは見ずに答える)
お爺さん「何やってっか 聞いてんの」
孫1・2「ポケモン アルファサファイア」
お爺さん「何、ポケモンアルファルファサーフ○△#$?」
孫1「ポケモン アルファサファイア」
お爺さん「何だそれは」
孫2「…それからプニプニもやってるよ」
お爺さん「ぷにぷに?ぷにぷにねェー?」

中年の夫婦の会話も見える。夫婦の会話の始まりないし途中から舞台上にシンイチ・ヨーコ親子も登場する。

中年男A「しかし、トランプって何考えてるんだべな」
中年女C「トランプゲーム?」
中年男A「ちがう違う。大統領の」
中年女C「あぁ、アメリカの」
中年男A「トランプは、随分強引な事言ってるな」
中年女C「そうだねぇ。…威張リンカ!」
中年男A「それ、む・す・め。娘の名前だっぺ」
中年女C「んね。大統領が威張っているって言ったの」
(間)
中年男A「にしても、世の中《分断》だの《政府機関停止》だの、心配だな」
中年女C「あたしらも《年金停止》なんて、なったら困るねぇ」
中年男A「そうだな。停止は困る…」

招魂碑の前まで進んだ二人にシンイチ・ヨーコ親子が目に留まる。

中年男A「誰だ、あの子供。普段見かけねーな」
中年女C「アメリカから来た子‥」

中年女C、シンイチ・ヨーコ親子に声をかける。

中年女C「お墓参りけ?」
ヨーコ「ええ」
シンイチ「うん」
ヨーコ「ここシンちゃん覚えてる?」
シンイチ「去年もきて、お団子食べたよ」
ヨーコ「そうだったわね…」

夫婦は招魂碑にお参りを済ませハケる。シンイチ・ヨーコ親子招魂碑に手を合わせて…

シンイチ「お母さん、このお墓に何て書いてあるの?」
ヨーコ「<しょうこんひ>って書いてあるの。戦争で死んだ人の魂を集めて、祀ってあるのよ」

ヨーコとシンイチ、帰り足で舞台前方へゆっくり歩いてくる。

シンイチ「うーん、人の魂?ってどこにあるの?」
ヨーコ「シンちゃんも、ちゃーんと持っているのよ。人の心のことだから」
シンイチ「…(無言でいる)」
ヨーコ「死んでも永遠に残るものなの。だから、みんなこうしてお参りしてるの」

▶紗幕DN、

▶招魂碑ハケ、割幕の中の舞台中央後方に祭り櫓設置
♪○…正調 白河盆踊り唄
[演奏:太鼓、囃子あり。掛け声は適宜、歌あり]
(紗幕前で)ヨーコとシンイチ親子に、声を掛ける人がいる。

ヨーコの知人「あら、ヨーコさんじゃないの。今年も来てくれたのね。ニューヨークから?今日?」
ヨーコ「ええ。なぜかこの季節になると、ここに来なければって思うの」
ヨーコの知人「シンイチ君、だったね?大―きくなったわね」
シンイチ「うん」
ヨーコ「この子には、日本のお墓参りを知ってほしいの。それに、今年は特別‥」
ヨーコの知人「あれから150年も経ったってことね」
ヨーコ「シンイチにもしっかり伝えておきたいことがあるから」
ヨーコとシンイチ上手ハケ。女性は別方向にハケる。

第3場 白河踊り変奏曲(メタモルフォーゼ)…3分
掛け声「ハァ ヤッショ ヤッショ ヤッショネ♪」
紗幕UP
▶場面は祭りの風景(白河民舞30名)、祭り櫓が見える
♪○続ける…正調 白河盆踊り唄
[演奏:太鼓、囃子あり。掛け声は適宜、歌はなし]
ナレーションの間に、一般の民衆たちも盆踊りの輪に加わる。

ナレーション 「櫓の太鼓に合わせて『白河踊り』を踊っている。この踊りは、戊辰戦争白河口の戦い(福島県)に参戦した長州藩(山口県)の兵士が、奥州白河に駐屯した折、白河の領民と一緒に戦死者の慰霊のため踊った盆踊りを長州に持ち帰り、150年が経った現在でも山口県の各地、82か所もの地域で『白河踊り』という名称で踊り続けられている。

正調白河踊りが一旦終了。客席前方、上手より母子登場。

シンイチ「ママ、早く、早く‥」
ヨーコ「シンちゃん、そんな急がないの。今年も大勢集まってるわね‥」
シンイチ「浴衣を着ていると、みんな昔の人みたい」
ヨーコ「シンちゃん、一緒に踊りましょ」
シンイチ「うん!」

♪②IN…白河踊り変奏曲=<ボレロa>
[演奏:オーケストラ]
#Aダンス…白河踊り[民衆の踊り](中村)
祭りの輪にヨーコとシンイチ親子も参加し、踊りの輪が広がる。
○「民衆の踊り」が続く(ここではダンサーは登場しない)。
(音楽の終了とともに#Aダンス、終了)
▶暗転(暗転幕DN)、京都のシーンに転換
▶奥に松羽目DN、上城下城の書き割り設置
▶下城書き割りの前方、奥舞台に金屏風設置

写真25:京都の公卿中川雅寛の踊りのシーン

第二幕 1868年京都・鳥羽伏見の戦い 20分
第1場 京都まちなか(季節は冬)…10分
ナレーション「ここは京都の冬。1868年(慶応4年)1月3日。
孝明天皇が亡くなり、若い天皇が即位し政治情勢が流動化している」

真鍋(笙)・三浦(篳篥)板付き。着物姿の女性=女官(中川社中の女性2〜3人)板付き。
中川(日舞)、下手袖待機。
▶舞台明転、暗転幕UP
♪③IN…「武徳楽」‥5分+α(1分)
[演奏:真鍋尚之・三浦元則・オーケストラ/舞:中川雅

寛・中川社中]

＊舞台上の笙と篳篥の2名が、上手金屏風前で板付きで演奏。

#Bダンス…日本舞踊（♪③に合せた優雅な舞:中川ソロ)

＊奥舞台では、京都の女官たち（中川社中）、が控えている。

中川、下手へハケる。

紗幕DN

▶紗幕中暗転、松羽目UP、金屏風ハケ下手よりナレーターが紗幕前に登場。

ヨーコとシンイチ、上手より登場。紗幕前での会話

シンイチ「うー寒い。ここはどこ」

ヨーコ「ここは京都のようね」

シンイチ「京都?僕たち旅行に来たの?」

ヨーコ「どうやら私たち、タイムトラベルして昔の時代に来たみたいよ」

シンイチ「へーっ」

ナレーター「はじめまして。私は歴史の案内人を務める春風亭昇羊です」

ヨーコ「私はヨーコ。この子はシンイチって言います。よろしく」

シンイチも軽くお辞儀をする。

ナレーター「ご出身はどちらですか」

ヨーコ「ニューヨークから来ましたの。主人が亡くなってから、この子と2人、時々日本に参ります。あなたは噺家さんですか?」

ナレーター「そうです。まだ駆け出しですが、昇太の弟子です」

ヨーコ「昇羊さんのご出身は」

ナレーター「神奈川ですが先祖を辿ると、山口県長州藩、山尾庸三の子孫です。」

ヨーコ「まぁ、因縁ね。私も‥‥」

▶SE:一発の砲声（または打楽器で砲声）

話の途中に砲声が入り、会話が中断される。

ヨーコ「‥都で戦争が始まったのね」

シンイチ「大変なことになりそうだね」

ヨーコ「シンちゃん。危ないからこっちに来なさい」

よーこ・シンイチ・ナレーター一旦ハケ

♪④IN笙と弦楽のためのレクイエム第2楽章Ⅲ‥5分10秒

［演奏:福島フィルハーモニックオーケストラ］

▶紗幕の中に明かりIN

紗幕中では、町衆（女性8名）たちが歩き回っている（往来）。紗幕中の演技※は、台詞はなし。京都の町衆の動き　（紗幕中）

遠くで時折、戦闘の音や爆音が聞こえる不安な洛中での町の様子

全体で1′:30″

・公卿の館に努める女官A1岡崎あけみ、同女官A2田村奈緒子

・町の人B1嶋野さん,B2大島さん

・町の人C1菊地さん:知人と待ち合わせ中で、逢う人を探している人、

C2芳賀さん:はC1の知人、奥舞台上で出逢う。

上手に逃げようとするC1を引き留め下手に一緒に逃げるようにハケル。

この2人は仲良しで一緒に話しながら歩いている人

全て紗幕内の演技

音楽IN

京都の町衆が右往左往する。

▶SE:時折遠くで砲声が響き不穏な照明。

町衆は、ダンス始まる前に適宜ハケ

紗幕UP

#Cダンス…前舞台でのダンス（3′20″間）

※着物を羽織った女性のダンス（プラネの女性6名）。

※踊りは時折不安な感情を示す。

▶SE:ダンス中に砲声（SE個所は別途指示）

（♪④の演奏と#Cダンス、ここで終了）

ダンサーたち、慌ててハケる。

照明で戦闘の明かりが明滅する

SE：再び砲声

第2場　鳥羽伏見の戦いの勃発…10分

○遠くで起こる戦闘（音）と行軍とダンスのシーン。戦闘の行軍（下手より西軍、上手より東軍）が舞台に出てくる。

ナレーター正面向き直り

ナレーション「一発の砲声が轟いた。鳥羽伏見の戦いの

始まりであった。慶応四年正月三日。旧幕府軍1万5千人に対し、新政府軍5千人。薩摩軍は鳥羽口から、長州軍は伏見口から、ミカドを守るという名目で出動した」。

♪⑤IN…＜ボレロb＞…5～6分
［演奏:オーケストラ］
○西軍と東軍の顔見世。両軍が行軍を象徴する動きで舞台上を通過する。
○遠くから戦闘の音（SEまたは打楽器群等で表現する）が聞こえる。
行軍にかぶって、新撰組（男性ダンサー）が舞台に出てくる。
#Dダンス…新選組のダンス(行軍の後)
※男性ダンサーが、舞台前方で、新選組の羽織（青色）で踊る。

ナレーション「圧倒的な兵力を誇る幕府軍に対して、英国から軍事顧問を迎え、重火器を備え、近代戦でのぞむ薩長軍。御香宮(ごこうのみや)に大砲4門を設置し、戦いが始まる。
市中が見渡せる桃山(ももやま)善光寺(ぜんこうじ)から伏見奉行所めがけて大砲を打ち込んだ。そのほとんどが命中。勝敗は一瞬のうちに決し、幕府軍は大敗を喫することになるのであった。ときの西郷隆盛は「鳥羽一発の砲声は100万の味方を得たるより嬉しかり」と語ったと伝えられている。」

ダンス終了後、新選組の副長 土方歳三が下手舞台に颯爽と登場し
舞台を横断しようとする。
舞台中央で、ナレーターが呼び止める。

ナレーター「あなたは、あの新選組の土方歳三さんではありませんか」
土方歳三「いかにも。拙者、新撰組副長の土方歳三だ」
ナレーター「何故ここに。それにその洋装は…。まだ早いのではありませんか」
土方歳三「いや、拙者もミニタイムスリップで、ここに来てみた。大軍の幕府軍が、どうして鳥羽伏見で薩長軍に敗れたのか。その戦況を確認するために来たのだ」
ナレーター「どおりでその恰好なのですね。次の幕、東北白河の戦いでは、その姿で活躍なさるつもりなのですね。」
土方歳三「いや、そのようには考えてござらぬ。東北白河では、拙者は欠席だ」
ナレーター「欠席?!」
土方歳三「そうだ。拙者これにて失礼する。あとは任せた」
台詞とともに、上手にハケていく土方歳三。

ナレーター「あッ、土方さ～ん。もっと聞きたいことが…」

残されたナレーター、呆然としつつ、気を取り直して
▶明かりFO、ナレーターをPINで抜く。

ナレーション
「鳥羽伏見の戦いの後、薩長政府は、嘉(よし)彰(あき)親王(しんのう)を征討(せいとう)大将軍(たいしょうぐん)に任命し、錦の御旗(みはた)・節(せっ)刀(とう)を授けた。
徳川慶喜は松平(まつだいら)容(かた)保(もり)らを連れ大阪を脱出。政府は、慶喜追討令を布告し、戦いの舞台は、関東から東北に移ることになるのであった」

▶明かりFO。暗転幕DN

＜休憩15～20分＞

▶場面転換
▶石垣ケコミを設置。下城書き割り上手後方へ設置

第三幕　戊辰・東北戦争へ…40分
第1場　戦い前夜（白石城、仙台城）
第1場―1　白石城での衆議…3分

東軍兵士たち板付き。（何となく上手側に会議メンバー）。
♪○…音楽
[第3幕1場に関してはピアノなどで適宜音楽を挿入]
▶暗転幕UP。明かりF-IN。

写真26:戦いの前夜仙台城でのシーン

○東軍内は、朝廷軍から舞い込んでくる会津討伐　の命令に対して紛糾している。

○評定が紛糾する様子のガヤガヤに話が重なり、よく聞こえない状況。時折怒号が飛び交う。

ナレーター下手に登場。

ナレーション「慶応4年という年は、閏年で、4月が2回あった。ここでいう4月は、実際は5月となる。

紗幕UP

ここ白石(しろいし)城(じょう)の中、仙台藩と米沢藩は奥羽諸藩に対して列藩会議開催を通知。各藩重臣が集まり白石(しろいし)会議が行われた。

仙台・米沢・福島・二本松・湯(ゆ)長谷(ながや)・棚倉・中村・三春・一関(いちのせき)・亀田・矢島(やしま)・山形・上山(かみのやま)・盛岡の14藩が集まった」

奥羽(おうう)鎮撫(ちんぶ)総督軍(そうとくぐん)から通知された会津討伐の命令に対して評定(ひょうじょう)が紛糾している(様子)」

(家来)「朝命(ちょうめい)が下ったのか!」
(家来)「戦いの備えだ!」
(家来)「いや、薩長の奴らのでっち上げだ!」
(家来)「何故だ!」
(家来)「好んでことを構えるのは得策ではなかろう」
(家来)「腰抜けめ!」
(家来)「錦の御旗がおくられてきたのだぞ」
(家来)「それは偽物だ!」
(家来)「会津をうたねばならぬのだ」
(家来)「何故だ!」
(家来)「理不尽、極まりなかろう」

♪○…場面をつなぐブリッジとなる音楽IN

▶明かり変化(大黒 緑⇒赤へ)、キャストの立ち位置変更

▶セット転換(上手の城の書き割りを、舞台中央側へ動かす)

▶階段設置、塀を上手に設置、樹木書き割りを下手に設置

第1場―2　仙台城での嘆願…4分

○ 鎮撫総督 九条道孝と鎮撫総督府 下参謀(しもさんぼう)の世良修蔵に相対する。

武将・兵士は奥舞台から舞台に下り、板付き。

上手より世良が床几を持参。九条を招き入れ、各々着座する。

ナレーター登場。

ナレーション「仙台城でも、松平(まつだいら)容(かた)保(もり)の城外退去と削封(さくほう)を条件として、14藩が署名した『会津救(きゅう)解(かい)嘆願書』について会議を開き、閏4月12日に仙台藩主 伊達(だて)慶邦(よしくに)と米沢藩主上杉(うえすぎ)斉(なり)憲(のり)が、鎮撫(ちんぶ)総督(そうとく) 九条(くじょう)道(みち)孝(たか)に拝謁(はいえつ)。会津藩への寛大な処置を望む列藩からの嘆願書、そして諸藩の重臣による副嘆願書。さらには会津藩家老名(かろうめい)による嘆願書の計3通を手渡した」

(家来)「九条総督殿!」
(家来)「この嘆願をご覧いただきたい」
(家来)「容保殿は朝敵で御座らぬ!」
世良修蔵「会津をうたねばならぬのだ。」
(家来)「鎮撫総督!」
世良修蔵「だから申しておるではないか!」
(家来)「何故か!」
(家来)「早くやれ!」
(家来)「慶邦(よしくに)殿、朝命が下っておる。」
(家来)「世良どの!」
世良修蔵「ならぬ!」
(家来)「何故だ!」
(家来)「だめだ!!」
(家来)「会津は恭順(きょうじゅん)を示しているではないか」

世良修蔵「いや容保の首だ!」
(家来)「道理というものがござろう」
(家来)「綱(つな)良(よし)殿はどうなのじゃ」
(家来)「九条総督!」
(家来)「あまりにも無体(むたい)な仕置きではないか」
九条道孝「朝敵は許してはならぬ」
(家来)「この嘆願を‥」

世良修蔵へ、嘆願書を突き出す。
▶明かり変化、世良以外ストップモーション
○世良は書状を受け取り、読むが、階段を下りながら嘆願書を投げ捨てる。
▶暗転幕DN
紗幕DN
暗転幕前にナレーター移動
▶城の書割ハケ、世良のシーンを設置(下手 旅籠、上手 刑場)
▶上手のバックに金屏風(裏面)、手前に鳥の子屏風
▶上手の舞台上に行燈(置き型)

ナレーション「九条総督と参謀醍醐(だいご)忠(ただ)敬(ゆき)は、嘆願を認める姿勢を見せたが、世良(せら)修蔵(しゅうぞう)は強硬で松平(まつだいら)容(かた)保(もり)を「罪人」と決めつけ、あくまでも容保の「斬首」を命じた。表の大義は『錦の御旗に発砲し朝廷に逆らった会津藩の討伐』 にあったが、裏の大義は『蛤(はまぐり)御門(ごもん)の変(1864年)』に対する私怨・報復と言われている。
嘆願書が受け入れられなかったことから、奥州諸藩は主戦論に傾いていく。
嘆願書の趣旨を捻じ曲げて伝えた世良修蔵への反感もピークに達していた。
当の世良修蔵は、会津侵攻の足掛かりを求めて白河城に入城し、その後、白河から仙台に戻ろうとしていた」

第2場　世良修蔵の乱行と誅殺
▶暗転幕UP
▶金沢屋の明かり(カッタースポット)F−IN

第2場−1　世良修蔵の乱行…6分

ナレーション「閏(うるう)4月19日、奥羽鎮撫(ちんぶ)総督府(そうとくふ) 下参謀(しもさんぼう)の世良修蔵は家来を連れて、福島の旅(はた)籠(ご)兼女郎屋の『金沢屋(かなざわや)』に投宿(とうしゅく)する」

▶紗幕UP
▶怪しい明かり+行燈風の明かり
♪○音楽:ピアノソロ(作曲:川島素晴※即興)
[演奏:川島素晴(pf)]
世良修蔵、(上手)より登場。

世良修蔵「まず酒だ!えっ<白糸>を呼べ!早くしろ!」
世良、刀を外し、あぐら座。白糸が上手より酒を持って出てくる。
白　糸「まぁ、世良さま。ご機嫌斜めなのですね。さぁさぁ、これで機嫌を直してくださいな」
世良修蔵「いつものことだ」
世良、酒をあおる。白糸、酒をすすめながら…
白　糸「世良さまにとって、会津さまを倒すことはそんなに大切なことなのですか?」
世良修蔵「松平容保は絶対に許せぬ。いや、関ヶ原で徳川(とくがわ)方(がた)に敗れて領地を削られた恨みを、今返すのじゃ!」
白　糸「まぁ。ずいぶん昔の恨みごとを…」
世良、再び酒をあおる。白糸、酌を続ける。
世良修蔵「ワハハ!戯言よ。そんなことより、ほれ。
世良、白糸に盃(または猪口)酌を差し出す。が…
世良修蔵「こうしてやる」(器を渡すようで渡さない)
白　糸「あん、わっちにも一口」
世良修蔵「ヤレヤレ。おっぴんひゃらりこ　シャシャリ〜コセだ」
白　糸「…」
世良修蔵「…」

世良と白糸のイチャイチャが続く
▶「深夜の明り」に変化する
舞台の片隅に刺客が登場。

赤坂幸太郎「殺すなよ。」
遠藤条之助「何?」
赤坂幸太郎「先ずは捕まえるのだ‥」(ひたひたと世良達に近づく)

遠藤条之助「…世良修蔵、覚悟せい!」(座敷に踏み込む)
白　糸「きゃー!」
世良修蔵「何やつ!」

両者で、一瞬ジリジリとした間がある。世良、盃を刺客に投げる。

白　糸「世良様お逃げください!」
世良、下手にハケる。追う赤坂と遠藤。
赤坂・遠藤「まて!」
世良修蔵「一生の不覚!くそっ!!」
白　糸「…」
赤坂幸太郎(遠藤)「×××××××!」
世良修蔵「△△△△△△△△△△△△」

世良、下手ハケ。遠藤・赤坂、世良に続く。
白糸、捕り物の侍たちを見送り、小道具類を持ち上手にハケる。

ナレーション「仙台藩の赤坂(あかさか)幸太郎(こうたろう)と福島藩の遠藤条(じょう)之(の)助(すけ)が寝所(しんじょ)に突入。世良を捕らえた」

やや見え転換(明かりで処理)
2場―2　世良修蔵の誅殺…4分

▶明かり変わって、下手の一角に四角くカッタースポットで区画
○ゴザ引きの上。処刑場(サス明かりで区切る)。早朝(場所は福島市内
阿武隈川の河原。

ナレーション「閏(うるう)4月20日、世良修蔵は、阿武(あぶ)隈川(くまがわ)の河原に引き出される」
下手より、赤坂・世良修蔵・遠藤姉歯武之進ら登場。
ゴザ敷き(区切ったエリア)の上に、世良が観念の体で座する。
○抜き身刀を持った介錯人(姉歯で良いのか?)が、構える。
赤坂幸太郎が、罪状認否と処刑を世良に告げる。

赤坂幸太郎「これまでの傍若無人な振る舞いはともかくこたび偽の嘆願書で我らの書状を偽った罪につき、斬首いたす!」

姉歯武之(あねはたけの)進(しん)「言い残すことはないか?」
世良修蔵「うーむ、認められぬ、無念…<間>己のこれまでの戦いの心境を残したい」

世良修蔵「陸奥(みちのく)に 桜狩りして 思うかな 花散らぬ間に軍(いくさ)せばやと」
姉歯武之進「御免!」

写真27:世良修蔵が誅殺されるシーン

○ジャーと血しぶきが飛ぶ。
▶暗転(暗転幕DN)、前紗幕DN、
▶場面転換:大門等設置、大黒幕UP
*大道具の配置…大門=中央奥、両脇壁、城壁・石垣をそれぞれ配置。

第3場　白河の戦い(季節は春)…20分

○白河城(現小峰城)が見える広場。大門が下手より正面奥に見える。門扉は閉まっている。(*第3場-1～3の場面は大道具の変化がある。)
暗転幕UP
ナレーター登場。

ナレーション「白河城は、古来より白河の関と呼ばれるよう

に奥州への入口、交通の要衝(ようしょう)であり、軍事戦略上でも重要な拠点であった。しかし、(白河口の戦いの前に)阿部家が棚倉に移封され当時は空城となっていた。白河城には二本松などの諸藩が守備兵として駐留していたが会津軍が奪還にやって来た」

♪⑥IN…松下功作
バレエ音楽「天の岩戸」No.3…約3分
[演奏:福島フィルハーモニックオーケストラ]

第3場—1　白河城の奪還…2〜3分

○会津藩が白河城の守備兵(2名)を追いはらう、東軍同士の戦いの場面。
(＊大門扉の片門を開け閉めして、中の兵士を追い出すシーン。)
○全員《仁》の染め抜きの陣羽織に身を固めた奥羽列藩同盟軍が舞台
正面に登場する(顔見世的な場面)。
♯Eダンス…舞台前方で、陣羽織を羽織った男性ダンサーたちのダンスシーン
♪⑥の楽章の切れ目等でダンサーハケ
○顔見世とダンスの後、一部の兵士たちが大門の中に入り、兵士たちの振り

ナレーション「白河城は、閏4月20日払暁(ふつぎょう)に、会津軍に攻撃され、簡単に城を明け渡した。会津と戦火を交える気がなかったためである」

城に踏み込んだ兵士・侍たちは勝鬨の声を上げる。

第3場—2　東軍の勝利…10分

○会津藩を中心とした奥羽列藩同盟軍が、白河城に立てこもり、西軍を迎え撃つ初戦に勝利するシーン。(＊城の大門の中で、鎧兜姿の西郷頼母(さいごうたのも)をはじめ、武将たちが皆に戦いを下知する)。
○兵士たちは旗指物を各自とり、城の中庭に結集する。
♪⑥-2 IN…松下功作 バレエ音楽「天の岩戸」No.3より4′13″〜 5′00″(ナレーション等にかぶって、音が入る)
[演奏:福島フィルハーモニックオーケストラ]
ナレーター、登場

ナレーション「閏4月22日、白石の地で、仙台藩士 玉虫(たまむし)佐(さ)太夫(だゆう)らが中心となって、奥羽25藩奥羽(おうう)列藩の盟約が成立。その後、5月3日に奥羽列藩同盟が正式に成立。6月には越後長岡藩も新政府軍との交渉が決裂し、同盟に参加。越後の6藩も加わり、奥羽(おうう)越(えつ)列藩同盟となるのである。」
上手より兵士たちが櫓を出し、その櫓の上に同盟軍旗を掲げる。
♪⑥-2 OUT
▶明り変わって

ナレーション「宇都宮にいた朝廷軍(征討軍)は、会津藩の白河進出に危機感を抱き、出兵することとなる。閏4月25日。西軍は宇都宮、大田原を経て白河城へ奪還攻撃をかけるが会津藩や旧幕府軍との戦闘となった」

写真28:東軍が白河城を奪取して勝鬨を上げるシーン

♪⑦-1&2 IN…松下功作 バレエ音楽「天の岩戸」No.3より…4′13″+(途中に銃声や大砲のSEまたは演奏を入れる。≫≫ ♪⑦全体で約8分)
[演奏:福島フィルハーモニックオーケストラ　]
○紗幕の中、大門の扉がゆっくり開き、総督 西郷頼母(さいごうたのも)、
会津藩副総督 横山主税(よこやまちから)、仙台藩参謀 坂本大炊(さかもとおおい)らの重臣たちが門の外に現れる。
○戦意が満ち、まさに出陣しようとしている(戦闘モードの

行軍ポーズ)。

○指揮官たちのときの声(短い台詞も)あり。音楽の中、武士・足軽

兵士たちが各々の戦闘場所に向かって行く(上下にハケるなど)。

▶見え転換(戦闘シーンに転換)。

上城書割ハケ(下城残す)。石垣配置換え。

▶大門・石垣を兵士が片づける。

*ここまでのシーンは2分ぐらいでこなす。その後ダンス隊登場。

♯Fダンス…前紗前のゾーンで戦闘のダンス(東軍の勝利の男性ダンスのシーン)(4分13秒)

▶ダンス中に戦闘シーンIのSEが入る。

スモークIN。

▶「ワー」という掛け声、時代物風の刀剣のぶつかり合うSE

▶弓矢のシューという擬音、ムービング照明

○ダンサーのアクティングエリアが、舞台下手側に拡がる。

♯Fダンスのつづき(下手のエリアで、引き続き戦闘のダンス)

♯Fダンス終了で♪⑦OUT

紗幕DN　　照明DN。

号外売りのおじさん風ナレーター、紗幕の前に登場

ナレーション「その後、閏4月29日には、奥羽列藩同盟軍、仙台・棚倉・旧幕府、新撰組などの諸兵が白河城に入城。総兵力2,700名あまりの結集する強大な城となった。しかし、この閏4月25日の戦いこそが白河における東軍の最後の勝利だったのである」

写真29:東軍の勝利する戦いのシーン

第3場—3　東軍の敗戦…8分

○東軍が西軍に敗れる場面(敗戦)=戦闘Ⅱのシーン。

ナレーション「閏4月28日。陣容を立て直した征討軍は薩摩、長州、大垣、忍(おし)の諸藩兵、約700人余が白河南方の入口 白坂(しらさか)に結集。

そして、慶応4年5月1日。ついに白河口の本格的な戦端を開くことになる。

西軍は奥州街道、棚倉街道、原方(はらかた)街道の3方より進撃を開始。戦闘は、列藩同盟軍の圧倒的な兵士数にも関わらず近代武器を擁する征討軍に敗れることになるのであった。同盟軍側では、この戦闘を前にして懸念を抱く家臣もいた」

▶紗幕の中に明かり

○場内から聞こえてくる評定。若手の家来から、総督西郷に意見が具申されるが、総督は会津魂の持ち主。即座に進言を退ける。

▶一角をサス明かりで抜く

○奥舞台(上手)の一角に、総督ら(西郷・坂本・横山+α)が床几に腰掛け、家来たちが跪いている。

家来たちから、意見が具申される。

若い家来a「軍議が不十分でございます」

別の若手家来が口を開く。

若い家来b「部隊を小隊にし、相手方の側面から攻撃を仕掛けて、西軍を混乱させるのが得策かと‥」

新選組隊士たち上手より登場。階段下に跪き…
新選組隊士「我ら夜襲をかけますので、やらせていただきたい」

など、矢継ぎ早に意見が出るが…
西郷頼母「ならぬ!ならぬものはならぬ。我らは、この地で正々堂々と戦って見せようぞ!」

ナレーション「総督 西郷頼母(さいごうたのも)はじめ会津藩副総督 横山主税(よこやまちから)、仙台藩参謀坂本大炊(さかもとおおい)らの武将たちが出陣する。

♪⑧IN…戦闘シーンは激しく、後半は美しさと悲愴を感じさせる曲‥♪⑧の音楽全体で8分30秒
[演奏:オーケストラ]
▶前紗幕UP
総督 西郷頼母はじめ、会津藩副総督の横山主税、仙台藩参謀坂本大炊らの武将たちが上手から続々入ってくる。
隊列は、鉄砲隊≫槍≫旗≫刀(一般兵)の順。
○戦闘Ⅱ[近代戦=東軍総崩れの場面]のシーンへ。今度は征討軍の銃火
器が威力発揮。統率のとれた戦法も相まって東軍の多くの兵士が銃弾を受けて倒れていく。武将たちのときの声や短い台詞が入る。
▶激しいレザービームとムービング照明。スモークIN。
▶途中、銃声や大砲のSE(または演奏)
○音楽に合わせ、激しい戦闘シーン(西軍の火器の象徴)が繰り広げられる。舞台奥のほうでは、群集劇的動作だけで演技がなされる。武将・足軽など群衆、倒れ込みのフォーメーション。
♪⑧2′30″付近まで西軍の圧倒的近代兵器の前に敗れていく東軍兵。

武士たち①「ワーッ」
武士たち②「やられた−」
武士たち③「ウッ」
横山主税「総督!」(西郷をかばい、撃たれる)

坂本大炊「横山殿!総督、わが軍の大砲が敵に届きません!このままでは、我が軍が全滅 ウッ!」(坂本も倒れる)

写真30:新政府軍(西軍)に攻め込まれるシーン

横山主税と坂本大炊が銃弾に倒れ、西郷頼母は兵士らに囲まれながら退却する(ハケる)。その後も倒れていく兵士が多くなっていく。負傷兵を担ぎ出し、代わりに急いで陣を守ろうとする者。徐々に退却する(上下にハケる)者など様々な動きあり。次第に戦死者・負傷者が増えていく。
ナレーション「しかし、西軍のスペンサー銃をはじめとする圧倒的近代兵器の前に、なすすべもなく敗れていった」

▶櫓を移動して、西軍が旗を立て替える。(♪⑧の2'30"あたり)
♪⑧の3'45"あたりで#Gダンスへ
曲の間に、兵士や大道具がハケていく。舞台が広くなったら…
#Gダンス…戦いで傷つき倒れ込む東軍のダンス
(敗北シーン)1'25"
▶(ダンス中?ダンス後?)紗幕DN
その後も倒れていく兵士(スローモーションで続く)。
♪⑧の音楽は以下のナレーション時は音楽中断、
(5'10"あたりで、次第に美しさと悲愴を感じさせる曲想に変化。)

ナレーション「この戦いで、仙台藩は二本松へ、棚倉藩は棚倉へ、会津藩は勢至堂(せいしどう)方面に退却した。
5月1日の白河口の攻防戦は、午前5時頃から7時間余の

激闘であった。戊辰戦争を通じて1日の戦死者では最多の戦死者を出した

この戦いでは、会津・仙台・棚倉など、奥羽列藩同盟兵2,700余人に対して682人の戦死者を出した。征討軍700人の戦死者はわずか13人であった」

▶赤く染まる谷津田川をシンボル化する明かりIN

（＊音楽を聴かせながら紗幕内の戦いは遠い昔のような一つの情景となって見える世界をつくる。）

♪⑧再開（美しさと悲愴さを感じさせる曲想のまま母子の対話にかぶって音楽は続く。）…1～2分

母子、舞台下手袖、紗幕前に登場

○現代人が歴史の映像を見ているような会話

ヨーコ「シンちゃん、これが戦争よ。みんな傷つき死ぬのよ」
シンイチ「‥‥」
ヨーコ「この戦争では、おうちの縁(ゆかり)の人もいたの」
シンイチ「ママの‥ご先祖様?」
ヨーコ「そうね。ママは、この戦いに参加した両軍の血を受け継いでいるのよ」
シンイチ「じゃあ、僕にもその血が流れているってこと…」
ヨーコ「そうよ、シンちゃん。あなたも、戊辰戦争両軍の血を分けた子孫っていうことね」

♪⑧音楽OUT

ナレーション「白河口の戦いは、その後、100日にもおよび列藩同盟軍側は征討軍に戦いを挑み、夏まで（7月末まで）少なくとも7度、白河城の奪還を試みたがいずれも敗退し白河城を奪い返すことはできなかった。

『奥羽越列藩同盟』が成立したものの、白河口の戦いで戊辰・東北戦争の両軍の雌雄は決していた。
その後、東北における旧幕府側、奥州諸藩の敗退の歴史が刻まれていくのであった」

▶暗転（暗転幕DN）

＜休憩2＞15～20分

▶大門横置き、櫓ハケ。下城書き割りあり。

▶第三幕と異なる戦闘シーンⅢ、配置。

（戦いの場面は二本松に転換する）

写真31:東軍の戦死者が倒れ、櫓には新政府軍旗が掲げられる

第四幕　戊辰戦争の終結　45分

▶暗転幕UP　消し黒幕DN

第1場　二本松少年兵士（季節は秋）…3分

○二本松の少年兵士と広田弘道のシーン（二本松の戦場／紗幕中で芝居する）

ナレーション「夏が過ぎても、東北各地の戦いは、まだなお続いていた。」

▶明かりF-IN

客席の上手側扉から、西軍の兵士たちが客席内に登場。下手から舞台上の門を通って、二本松藩の兵士たち(少年兵含む)登場。

敵陣へむかう出で立ち。刀・銃等の武器を携えながら舞台中央に進む。

客席通路に西軍兵士たち登場。銃を持ち直す。

西軍兵(指令官)「構え!（上手側兵士、銃を構える）撃て!!」

西軍兵士(A)は構えを解くも…

▶銃声

二本松兵、全滅は免れるが、撃たれて倒れる者がいる。

西軍兵士(A)「あれは、子どもではないですか?」
指令官「何、子どもは撃つな!空に向けて撃て!」

▶再び銃声（空へ）

この西軍のやり取りの間、二本松兵たちは、撃たれた者に肩を貸すなどしながら門を通って城へ戻る。が、少年兵士の一人がその場にひざまずいている。一人逃げ遅れている。

兵士(B)「申し訳ありません。当ててしまったようです」
指令官「馬鹿者。子どもは撃つなと言ったのに」
兵士(B・C)「…(引き金を引いてしまった西軍兵はバツが悪そうな態度でうなだれ、ハケる)」

▶西軍(司令官側)の明かりDN

舞台上に一人残された少年兵の前に西軍の別動隊が登場。少年兵、銃を構え直すなど西軍を威嚇しながら後ずさる。

西軍兵に向け引き金を引くが…

岡山徳次郎「無念‥弾がない‥銃を、銃をくれ!」

少年兵は、まわりに落ちている銃を拾おうとするが、西軍兵士たちに囲まれる。少年兵が抗う。西軍の別動隊長が口を開く。

小隊長(広田弘道)「おとなしくしろ!早く傷の手当てを…」
岡山徳次郎「来るなぁ!このまま、生き恥をさらすなど武士の名折れ…」

西軍兵は、少年兵の銃の銃身を掴んで離さない。少年兵は、振り払おうとするが、西軍兵は離れない。

広田弘道「あっぱれな男よ。私が引き取って養育してみたい!!」
少年兵は意識を失い、崩れ落ちる。

暗転幕DN
▶暗転。紗幕中にスモークIN+ドライアイスIN
▶舞台転換(上城設置)。
▶死体としての「倒れ込んだ兵士」を両軍入り乱れて配置
→3幕終了時と同じシーンに転換。

♪⑨ピアノソロ(作曲:川島素晴※即興)転換時
[演奏:川島素晴(pf)]IN…1〜2分

ナレーション「9月10日(二本松 霞ヶ城の落城は7月29日)二本松藩降伏・武装解除。多くの少年兵が戦い、風に散った。

岡田篤次郎13歳もその一人。死に瀕していながら、なお戦闘意欲を失わない13歳の戦士は、西軍兵士たちの心を動かした。

土佐藩の小隊長 広田(ひろた)弘道(こうどう)は『この少年は自分が引き取って育てたい』と思った。しかし、少年の死でそれは叶わなかった。広田は、少年兵士の気概に感動して<君がため 二心(ふたごころ)なきもののふの 命は捨てよ 名は残るらむ>と句を詠んだ」

ナレーション「木戸孝(たか)允(よし)(元長州藩士)は『賊軍の死骸には手を付けるな』と命じ、会津城下の千数百の遺体は、野犬や鳥の餌食となった。この命は、公式なものではないという説もあるが、ともあれ、東北戦争は終わりを迎えたのである」

♪⑨OUT

第2場　民衆の弔いと招魂
▶上城設置。▶紗幕UP、照明F-IN。

○舞台奥の巨大画(松の木が一本だけ見え、あとは戦争の後の茫漠とした世界が広がる)が赤く染まっている。戦闘で破壊された石垣、焼け爛れた城跡が見え、戦闘で倒れた遺体が、そこここに横たわっている。

第2場−1　民衆の弔い…7分

○白河の民衆たちが、戦死した遺体を片付け、弔おうとしている。

町民A「あんた、それは東軍の死体でねーのか」
町民B「俺たちにしちゃあ、死んだら皆仏だっぺ。ぼさっと突っ立てねぇで、手伝え」

黙々と作業する町民B。手を出すことをためらう町民A。

町民A「んだって、賊軍は「祀(まつ)るな」って言われてるらしいで‥」

町民B「祀(まつ)るも何も、仏さんに手ぇ合わせるぐれぇは誰にも迷惑かかんねぇべした。「おかみ」がどうとか、賊だとか何だとかは、俺は難しくて　わかんねぇ。見てみぃ。みんな同じ日本人。同じ人間だっぺよ」

作業に戻ろうとする町民B。町民Aは、周りを見まわす。

町民A「‥んだな。わだしらには「ニシキノミハタ」も何も、ここで生きていくこととは関係ねーもんなぃ」
町民B「昔から神さんも仏さんも“いっしょくた”にしてきたべ」
町民A「‥あぃ、わがった。わだしも手伝うがら」

一番近くの遺体に手を合わせる町民A。板戸に遺体を乗せて運び出す作業に加わる町民A。ほかの町民(黙役)も作業を続ける。いたるところに東軍の屍が転がっている情景が続く。

♪⑩IN…「よみがえる」のインストゥルメンタルバージョン…5〜6分
[演奏:オーケストラ／歌:なし]
○明かりの変化だけで、音楽を聴かせるシーン。音楽の後半でダンス(舞台前部で踊る)がはいる。
#Hダンス…戦闘によって傷つき倒れ込む兵士を見た民衆の気持ちを表す男女のダンス(民衆の嘆き・憐み・祈りのシーン)。
▶音楽の切れ目で照明FO(見え転換)、紗幕DN
▶遺体となった群衆ハケ。
▶舞台奥の巨大画の前に大黒幕DN(中割幕も閉じる)。
▶この間に、招魂碑設置。合唱のポジションに人々が整列。
▶奥舞台のへりにLEDランプ並ぶ。
♪⑩OUT
▶明かり入る。紗幕UP
○舞台奥に招魂碑、その他の大道具はないシーン。客席や舞台上手・下手各所から、浴衣姿の民衆がLEDの蝋燭を持って登場し、奥舞台・橋掛かり・招魂碑の縁に蝋燭を並べ、お参りしていく。

写真32:招魂碑の前で合唱曲「よみがえる」を歌うシーン

第2場―2　合唱「よみがえる」　…12分

＊合唱曲を唄うのは合唱団のみ。
♪⑪IN…合唱曲A「よみがえる」(混声四部合唱)(作曲:川島 素晴／作詞:志賀野 桂一)…6〜7分
[演奏:オーケストラ／歌:コミネス混声合唱団&一般参加者]

1. ヒトはみな　同じ生物(いきもの)
それなのに　なぜ戦うの
　　いくつもの正義(せいぎ)
　　いくつもの大義(たいぎ)
やがてそれらは　空に消え
美しい土地の思い出(おもいで)だけに
人びとに　迦微(かみ)が宿って
失われた生命(いのち)には
厚(あつ)い 弔(とむら)い 祀(まつ)りごと
よみがえる
よみがえる
兵士(へいし)の誇り
民(たみ)の愛(あい)

2. 風わたる　他国(たこく)のまちで
光舞う　祭りの渦(うず)に
　　いくつもの出逢い(であい)
　　いくつもの歓喜(かんき)
やがてそれらは　くりかえし
愛のいとなみ生命(いのち)の連なり
懐かしい　故郷(こきょう)の匂い

山川草木（やま・かわ・くさ・き）みな仏（ほとけ）
ご先祖（せんぞ）様の　面影（かげ）映し
よみがえる
よみがえる
子どものすがた
母の貌（かお）

▶暗転幕DN紗幕DN
歌の終わりとともに、合唱団員は招魂碑の縁・奥舞台・橋掛かりに蝋燭を置きハケる。舞台に残っていた民衆も上下にハケる。

ナレーション「戊辰戦争では、これまでの日本の戦死者に対する扱いが異なっていた。
錦旗に発砲した会津藩を倒すという大義。朝廷に逆らったらこうなるという見せしめなのか、新政府軍は敵の戦死者をあくまで「賊」として扱い慰霊の対象とはしなかった。
こうした考えは従来の武士道とも異なり、古来より敵味方の区別なく行われてきた戦死者の慰霊の仕方とも異なるものであった。まして、民衆においては「輪廻転生」「神仏習合」の観念も強く、死者を色分けすることはなかった。
この戦争で彷徨った東軍の多くの戦死者の魂は神仏の心を宿した民衆によって祀られることで救われたのである」

写真33:招魂碑の上から先祖の声が聞こえ、碑が天上に飛び去る

第2場―3　招魂碑の前で…5分
暗転幕UP
▶招魂碑に明かりIN
静かになった招魂碑の前にヨーコとシンイチが歩いて来る

ヨーコ「また、昔の人たちを思いだす季節になったわね。」
シンイチ「昔の人?亡くなったおじい様やおばあ様のこと?」
ヨーコ「いいえ、もっと前の曾祖父（ひいおじい様）や曾祖母（ひいおばあ様）のことよ。そして、あの人たちがどんな気持ちで生きていたか想像してみて」
シンイチ「ご先祖様のことか…ねえ、ママ」
ヨーコ「なぁに、シンちゃん」
シンイチ「敵と味方に分かれていても、好きになるの?」
ヨーコ「そうね。同じ魂を持っている人間だもの、憎しみ合いばかりではないのよ」
シンイチ「人はみな、仲良しになれるよね」
ヨーコ「そうね。私たちのご先祖様もそうだったのよ。きっと」
紗幕UP
♪○IN…林英哲の和太鼓(経文を唱える)ながら即興演奏
[演奏:林 英哲]‥30秒
▶曲中に、招魂碑の墓碑の上部分がゆっくり吊り上げられていく
＊ここでは、ややシュールな不思議な世界が現出する。
▶それに合わせた明かりにする
＊ここで先祖の声が、微かに、しかし、はっきりと聞こえてくる

天の声(男)「シンイチ、ここから私たちがしっかり見守っているから、安心して暮らしなさい」
＜少しの間＞
天の声(女)「それから、シンイチ。命を大切にしてね」

シンイチ、天を見上げながら

シンイチ「遠いおじいちゃーん!遠いおばーちゃーん!わかったーぁ」

暗転幕DN
▶盆踊り櫓などバージョンに舞台転換
▶墓碑の土台は下ハケ

第3場　盆踊り～大団円　…17分
▶数多くの提灯ドロップDN、櫓が中央に設置される
暗転幕UP

第3場－1　西軍兵士の対話…4分

冒頭は、正調白河踊り（白河盆踊り囃子が影舞台で演奏）。

舞台に見えている西軍兵士は幽霊。＊西軍兵士は現代世界にトリップしてきている設定。

奥舞台に囃子方の太鼓

♪○IN…正調 白河盆踊り唄

[演奏:白河民舞愛好会／囃子あり／掛け声適宜／歌なし]

ナレーション「戊辰戦争は、現代のように顔の見えない戦争ではなかった。苛酷な戦いの最中にも敵味方を超えた深い交流、人間同士のさまざまな出会いがあった」

ナレーション「「白河踊り」の伝承は、この証左(しょうさ)である。西軍の部隊は、武士だけでなく農民や町人達も従軍(じゅうぐん)した。死と背中合わせの戦いの中、故郷を遠く離れた地で出逢う「白河踊り」は、彼らの癒しと男女の出逢いや無礼講といった無二の年中行事のひとつだったのではと想像出来る」

写真34:150年前の盆踊り、上手に西軍兵士の幽霊がいる

盆踊りの民衆を見物している西軍兵の台詞が聞こえてくる。

西軍の兵士a「長い戦争だな、家(うち)の女房は元気かなぁ」

西軍の兵士b「そうだなぁ。故郷(さと)に早く帰りてぃよ」

西軍の兵士a「おい、あの子見てみろよ」

西軍の兵士b「踊りの＜切れ＞がよいな」

西軍の兵士a「そうじゃないだろ、何見てんだ!」

西軍の兵士b「なに、こっちの子もうまいな」

西軍の兵士a「…うなじの色気が凄い。故郷(さと)に女房が待ってなければ、連れて帰りてぃ女だ」

西軍の兵士b「一緒に踊って声かけてみるか」

兵士、会話終了とともに踊りの輪に入る。

見よう見まねで踊りの輪に入り、目をつけた踊り手の女性へアプローチする。その後西軍兵士ハケ。民衆が集まってきている。

ナレーション「『白河踊り』は、山口県（長州藩）へ伝承しその範囲は、萩市、山口市、宇部市、防府市(ほうふし)に及んでいる。」これだけ多くの地域に『白河踊り』が伝わるためには歌詞は字の書ける者が書き取り節(ふし)と踊りは身体で覚えて帰るといった形で、複数の人間によって持ち帰られたに相違ない。

～遠く離れて逢いたい時は
　月が鏡であればよい。
～恋し恋しと鳴く蝉よりも
　鳴かぬ蛍が身を焦がす」

3場－2　母子の対話 …2分

ヨーコ「やっぱり。この声を聴くと元気が出るわね」

シンイチ「ママ、さっきのご先祖様の声は、はっきり聞こえた?」

ヨーコ「ええ、私にもはっきり聞こえたわよ」

シンイチ「僕は体の中から聞こえたような気がしたよ。あの人たちの血が僕にも流れているからなのかな」

ヨーコ「そうかもしれない、私も同じように感じたわ。」「敵・味方を超えて愛し合って子どもが生まれ、また新しいご縁が出来ていく、あなたも私もそのひとりよ。」

ナレーター昇羊：長州藩の血が騒ぐ‥
踊りの輪に加わる

掛け声太田ほか「ヤッショ ヤッショ　ヤッショネ♪」

掛け声2「ヤットセーエエ ヤンソリャア ドッコイドッコイ」

太田「ヤッショ ヤッショ　ヤッショネ♪」
　　○掛け声をきっかけに、　櫓ハケ

3場−3　ダンスボレロ…8分

舞台中央にダンス隊が自然な形で登場
♪⑬IN…＜ボレロc＞‥8分
[演奏:オーケストラ／作曲 川島素晴]
#Jダンス…ボレロのダンス。静かな、劇の回想風ダンスから、激しく勇壮さを感じさせるダンスに変化
※同心円状のフォーメーション
群衆の踊り（Aダンス）が終了近くに、
地元の踊り手プロダンサー加わっていく。総出演の踊りとなる。

掛け声「ヤッショ　ヤッショ　ヤッショネ♪」（元歌）

写真35:再び現代に戻り皆が踊るなか、和太鼓登場

3場−4和太鼓「飛天遊」

▶大黒幕UP、櫓ハケ、提灯UP。第一幕の舞台仕様にもどる。
▶♪⑬の後半で、引き枠と林 英哲氏登場。
舞台上に民衆やダンサーはハケている状態で演奏。
♪⑭IN…和太鼓協奏曲「飛天遊」の後半部分の演奏
[演奏:オケ+林英哲（和太鼓）]
和太鼓終了後、拍手あり。
合唱団入場
▶全員正面を向き、静かな感じで合唱のフォーメーションに移行。

写真36:平和ソング「元素わたし」の大合唱シーン

3場−5　合唱「元素わたし」（斉唱）…3分

最後は太田社中・民衆・ダンサーも途中から合唱に加わり大合唱となる。
♪⑮IN…「平和ソング」より＜元素わたし＞（合唱
作曲:松下 功／作詞:夢枕 獏）…3分
[　演奏:オーケストラ／歌:全員合唱]

（合唱）
わたしは不思議　わたしは不思議
わたしのからだ　わたしの目

わたしの腕や　わたしの心
わたしは宇宙でできている
宇宙はたくさんのわたし

なんだかすごいぞ　すごいねわたし
すみれ　なのはな　れんげそう

みんなわたしで　みんなあなた
なんだかころころ　うれしいね
なんだかきろきろ　たのしいぞ

カエル　ミノムシ　オニヤンマ
風や　かみなり　空の雲

みんなわたしで　みんなあなた
なんだかとんとん　おもしろい

なんだかほくほく　いいきもち

恋も　いかりも　かなしみも
愛や　まよいや　うらぎりや
風や光や　よろこびも

みんなわたしで　みんなあなた
みんなわたしで　みんなあなた

♪⑮OUT
▶音楽の終了に合わせて、明かりFO。巨大画のみ明かりがさしている。
▶暗転
【おわり】(拍手!!!)
▶明転　→　カーテンコールに移る。

カーテンコール(5分)

出演順の再登場、前列に進み、次のグループと入れ替わる。→これを繰り返し、全員そろってお辞儀、拍手を受ける。

▶オペラカーテンDN

写真37:カーテンコール、故松下功の遺影を持つ音楽監督の川島(左から2人目)

【Fin】

5. 公演の反響とまとめ

様々な危機を乗り越えて実現にこぎ着けた新作楽劇は、無事成功裡に幕となった。

■来場者のアンケートから

来場者の反響であるが、アンケートを実施した結果は、回答者370名(回答率48%)であった。内容については、1大変良かった210件(56.8%)、2良かった110件(29.7%)、3ふつう18件(4.9%)、4良くない0件(0%)、無回答32件(8.6%)であった。全体的には大変良かった・良かったと答えたのが320件(86.5%)に達した。観客層は高齢者が多く、60歳以上が60%、50歳代も13%を占めた。来場者の住まいは62%が白河市内、市外が35%であった。

自由記述の意見では、155名(41%)もの記述回答があって、すべてを記載できないが、代表的なものを以下に示してみる。

<市民参加の楽劇に関してのコメント>
・「素晴らしい演出です。白河市民参加でこれ程すごいことが出来るとは正直思ってもみませんでした、楽劇とは肌で感じさせるものですね。」
・「大変レベルの高い歌(劇)でした。これに参加できる市民の皆様のこれまでの努力に頭が下がります。」
・「皆様の心が集まって、仁の心を表せたとおもいます。…地元小中学生のもずっと知ってもらいたい内容ですね。」
・「市民運営、キャストがすばらしかった!」
<出演者のパフォーマンスに関してのコメント>
・「和太鼓の長い時間 素晴らしい曲を聞き感動　二度と機会は来ないと思う。来てよかった。ナレーションとオーケストラとバレエのコラボ　インパクトあり大変良かった。戊辰戦争何となくよく心に刻み込まれました。」
・「太鼓、笙、舞踊やバレエ、オーケストラ、殺陣と舞台の中で贅沢に楽しめました。戊辰戦争の苦しい思いも感じ、先人の無念に涙しました。仏の心のありようを感じた舞台でした。すばらしかったです。」
<戊辰戦争と白河に関してのコメント>
・「戊辰戦争が何代か前の白河の住民の現実だったことに想いをはせる事を今日実感しました。」
・「白河で本格の楽劇がみられたこと感動にたえません。」
・「戊辰戦争に関して稲荷山での凄惨な戦いというイメー

ジから、激しく、悲しい物語を思い描きがちでした。始まりの少し不気味な絃の音、音楽、林英哲の激しい嵐のような演奏や、3幕4幕冒頭の川島素晴のひきつるようなピアノからはその印象を掻き立てられましたが、一方で昇羊さんの軽妙な語りや舞、バレエ、母子の会話からは静・柔といった印象を受け、不思議な調和のある作品だと感じました。最終幕、幕が上がった瞬間の合唱に鳥肌が立ちました。幼い頃踊ったことのある白河踊りが150年前から現在へとつながり、人の結びつき、縁（昇羊さんや母子の縁も含め）に想いが向く舞台でした。」

・「甦れ仁の心の総まとめみたいで良かった。」

＜その他全般＞

・「知識として知る歴史ではなく、人の感情に訴える歴史の転換期にこの地で起こった出来事を感じさせてもらいました。大スペクタクルの美しい舞台でした。ここだけの公演では、もったいないと思われました。東西軍の戦死達を悼むバレエの少女たちが天使のようで涙が出ました。」

・「とてももったいない!初日にして千秋楽とは　とてももったいない!」

など観客の皆さんが、楽劇に没入して観・聴いてくれたような感想が数多くみられました。

■新聞ほかの反響

福島民報新聞の記事キャプションでは。「白河の底力を発揮～影向のボレロ市民が躍動」（写真40）、「市民共同迫力の舞台」「迫力の演出に酔う」などの文字が踊り、約1000人の観客が酔いしれたと記された。

県外の観客には戊辰縁の人もいて「白河のエネルギーを感じた。テーマの仁の心は日本人の心に通じる」（白虎隊士・飯沼貞吉の孫さん飯沼一元さん）などのコメントが記された。

また東北放送のニュース番組＜Nスタみやぎ＞でも本楽劇が取り上げられ、その様子が紹介された。出演者のインタビューもあり、民衆役の岡部光男さんは「この楽劇に出て20歳ほど若返った」と述べ、シンイチ役の和知泰良（小6年）は「コミネスが出来て、この辺りも（公演があって）そこそこ賑やかになってきた。」といった感想が放送されたのである。まちづくりにおける公共ホールの役割を問うニュースで兵庫県の芸術劇場に並んで、白河が取り上げられた重大さを筆者は感じた。

また演奏で参加してくれた音楽家には白河出身者もいて、そのひとり平子さんが以下の感想を寄せてくれた。

「今回はオケ中でパーカッションを担当させていただきました平子と申します。

今回は大変お世話になりました。素晴らしい台本、構成、演出、本当にお疲れ様でした!!

私は今回、ビオラの田口さんからお声をかけていただくまで、白河でこんなに大きなものが企画されていることは何も知らなかったので、今回はやや陰の役割でしたが携わらせていただき嬉しかったです。

やはり、生まれ育った街のホールで、実際に地元で起きた事の楽劇は特別なものでした。何しろ、実家の近くにある「戦死墓」は、子どもの頃私を含めた近所の子どもたちのとっておきの遊び場だったので、よくあの大きな墓石の段に座っては〝王様崩し〟をしたり、空いている場所ではドッジボールや縄跳び、塀を使っては、陣取りゲームなど‥‥お墓とは知らずに公園のような感覚で本当によく遊んでいました。

しかし、子供ながらに何となく〝ここってお墓なの?!〟と感じ始めても、眠っているたくさんの人たちが喜んでくれているような気がして、自然とみんなが集まっては遊んでいた記憶が鮮明に残っています。今思い出せば、とんでもない罰当たりなことで申し訳ない気持ちになりますが、やはりなんとなく子共たちを歓迎してくれるような思いを抱けた場所であったことは間違いありません。

そんな地元の少し前の時代に実際に起きていた話は、とても興味深いものでした。松下先生の急逝でいろいろ大変だったことと思いますが、無事に本番を迎えられ、成功に終わってよかったですね!!　おめでとうございます。

《祝》市民の皆さんが一つになって何かを作りあげるということは、本当に素晴らしいことですね。館長さんの素晴らしい企画をまた楽しみにしています!

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。」パーカショニスト　平子ひさえ[原文のまま]

写真38:公演直前のリハーサル、筆者(右)

■まとめ

公演の評価に関しては、国の助成基準に照らすと、社会的・文化的効果として、その①芸術的インパクト、②社会的インパクトがそれぞれどれ程であったのか。経済的効果として③経済的インパクト(経済波及効果)がどれほど得られたのか数値を交えて立証しなければならない。

本事業の評価に際し、来場者アンケートの他に、基本的な数値を以下に示しておく。

和風オペラで大団円

芸術で戦いの本質表現

白河市 来年9月 戊辰150年記念事業

コスキン日本代表に

森井さん(中)

須賀川 一が全国へ

来場者10万人突破

写真39:共催者の福島民報新聞社の事前記事

本事業に参加し舞台に立った市民の数は142名に達する。先に論じた合唱・演劇・殺陣・群舞・バレエの5部門の稽古回数は合計で95回に達する、民舞や・地元太鼓隊の稽古を加えると100回を優に超える稽古が積み重ねられ本番を迎えている。こうした楽劇の制作過程で培われる新たな文化的コミュニティの形成は大きな意味があると筆者は思うのである。ワークショップや、アウトリーチ活動が盛んとなっている今日、そうした活動と同等またはそれ以上の効果はあると考えると、楽劇という1プロジェクトが100回のワークショップ事業に匹敵する事業を内包していると思われる。

本楽劇の動員数であるが、チケットの売り上げ枚数は863名分、招待席28名となった。販売可能なチケットは完売であった。しかし、市の戊辰戦争150年記念事業という事もあり、入場料金は大変安めに設定(SS席4000円、S席3000円、A席2000円、B1500円)した。したがって、満席であっても予算上の入場料の寄与率は6.5%であった。全体の事業費をカバーするために、公的な負担金(国の補助率19.4%、白河市の補助率60.8%)が大きな割合を占める結果となった。

前日に行われたGPでは市内小・中・高校生ほか関係者を招待し、演出家のレクチャーと本番と同じ通しでの舞台を無料鑑賞させた。参加者は、約500名で、楽劇2日間を通しての動員数は約1300名という結果となった。

なお、コミネスのホールは1104席収容の大ホールであるが、オーケストラピット157席、音響・照明・ムービング・レーザー照明のそれぞれの調整卓が後方客席で行うためにつぶれる席36席、その他見切り席(オーケストラピットが沈まないために見えなくなる席)が20席となり実際の収容人数は900席を切ることになる。

ちなみに30年度の「文化創造拠点形成事業(事業名称:「白河・文化芸術創造活用プラットフォーム形成事業」)」は本楽劇を含め、4事業まとめて申請している。その参加人数実績値は3100人、内域外者1085人となった。経済波及効果は31,680(千円)となっている。

また、芸術的効果は、数値では測れないが、池田卓夫氏(元日本経済新聞記者・批評家)からの好評価をいただいた。

また制作顧問の平井洋氏は、これまで行ってきたコミネスの創造的舞台制作事業を総括して「杉山洋一、松下功、それに今回川島素晴が加わった。その的確な人選と、くらいついていく市民と、その中間の熱心な指導者たち。最終的に、継ぎ目が分からなくなる一体感は、稀有の文化的蓄積と言っていいだろう。」と書いてくれた。

写真40:福島民報新聞社の公演後記事

白河文化交流館コミネスでは、2016年開館以来、大型の創造的舞台制作として、「白河版オペラ魔笛」(2017年)、「野外・スーパー薪能」(2012年)、「SPACE OPERA KEGON」(すぺーす おぺら けごん)(2018年)を公演してき。本稿の楽劇はこうしたシリーズの第4弾にあたる。その後、白河ジャパネスク能/オペラ「恋歌舞SO-MON」(こいうたまい そうもん)を2019年7月20日～21日に実施するに至っている。2020年には、三館共同制作オペラ「ラ・トラヴィアータ(椿姫)」公演も行われる。

本稿で取り扱った楽劇はこうした舞台制作の中で最も参加人数も多く、制作に最も多くの時間と労力を費やしたプロジェクトであった。人口6万人を切る都市が取り組むには荷が重いと思われるものではあったが、コミネス開館来、徐々に出来上がりつつある文化コミュニニティの力が総結集し、またスタッフワークの成熟度が上がって初めて可能となったものと考えるのである。

「楽劇の新作上演は困難と苦労がありながらも魔力に憑りつかれて創られ続ける。(平井洋)」　了

◆参考文献

・『戊辰白河戦争』戊辰150年記念誌/白河市　2018年　歴史春秋出版株式会社
・小説『白河大戦争』白川悠紀著、栄光出版社 2017年
・『戊辰白河口戦争記』復刻　佐久間律堂著 歴史春秋出版社　1988年
・『戊辰戦争』保谷徹著、吉川弘文館　2007年
・『戊辰戦争』～敗者の明治維新　佐々木克著 中公新書　1977年
・『戊辰戦争忠魂録』樫山巌著　レター出版 1997年
・『図説戊辰戦争』木村幸比古編著　河出書房新社　2012年
・『鳥羽伏見の砲声』星　亮一著　三修社　2009年
・『仙台戊辰戦争史』星　亮一著　三修社　2008年
・『敗者の維新史』荒川勝茂著　青春出版社 2014年
・『戊辰戦争の新視点　下　軍事・民衆』奈倉哲三・保谷徹・箱石大編　「戊辰戦争期における陸軍の軍備と戦法」淺川道夫著 吉川弘文館　2018年
・『戊辰戦争忠魂録』樫山巌著　レター出版 1997年
・『戊辰戦争を歩く』星　亮一・戊辰戦争研究会編　光人社 2010年
・『それぞれの戊辰戦争』佐藤竜一著　現代書館　2011年
・『戊辰物語』東京日日新聞社社会部編1983年
・『戊辰戦争とうほく紀行』加藤貞仁著　無明舎出版　1999年
・『数学者がみた二本松戦争』渡部由輝著　並木書房2011年
・『白河踊り』中原正男著　書肆侃侃房2017年
・絵本『白河踊り』絵と文:平川里 平川コミュニティ推進協議会2018年
・『1868年』～明治が始った年への旅 加来耕三著　時事通信社2018年
・小説『ラ・ミッション』～軍事顧問ブリュネ 佐藤賢一著　文春文庫　2017年
・DVD:ベジャール/東京バレエ団『ザ・カブキ』2012年